

# 司令長官の孤独

山田 遼

昭和十六年九月十一日から二十日までの十日間、東京・目黒の海軍大学校で、対米英戦争を想定した連合艦隊の図上演習が行われた。

この年の六月には、ヨーロッパでは独ソ戦が勃発し、三〇〇万の大軍を投入したドイツ軍は、ソ連領内深くに進攻を続けていた。

一方、日米間の関係改善をはかる外交交渉は一向に進展せず、七月下旬に日本軍が南部仏領インドシナへ進駐したのに対し、アメリカとオランダは日本の海外資産を凍結し、八月一日にはついに、石油輸出の全面禁止にふみ切った。

予想外に強硬な米国側の対応に直面して、開戦が撤退かの選択を迫られた日本政府は、外交交渉で事態の打開に努めたが、同時に陸海軍の対数ヶ国同時作戦の検討も開始されていたのである。

日本海軍の作戦全般を統轄する海軍軍令部では、八月下旬には対米、英、蘭の同時作戦計画がほぼ出来上がっていた。しかしこの計画書の中には、戦闘を実施する連合艦隊が強く要望したハワイ奇襲攻撃が、まだ盛り込まれていなかった。

開戦の第一日目に、ハワイの真珠湾軍港に集結している米太平洋艦隊に対し、空母の艦載機集団で奇襲攻撃をかけるというこの作戦は、これまでの日本海軍の戦略計画とはおおよそかけ離れたもので、当時の連合艦隊司令長官、山本五十六大将の発案によるものだった。

山本司令長官がこの計画を着想したのは、前年の昭和十五年十一月頃とされている。

彼は昭和十六年一月七日付で、当時の海軍大臣及川古志郎大将に「軍備に関する意見」という意見書を提出している。

この中で開戦劈頭にとるべき作戦計画として、敵主力の大部分が真珠湾に在泊する場合、飛行機をもって、これを徹底的に撃破し同港を閉塞すべきだと主張し、月明の夜または黎明に、全航空兵力をもって全滅を期して、敵を強（奇）襲すと記している。

さらに彼は、勝敗を第一日において決する覚悟が必要だとして、この作戦の実施に当たっては、自分は航空艦隊の司令長官を拝命し、直接攻撃部隊を指揮したいとまで述べているのである。

しかしこの破天荒ともいふべき計画は、作戦の中核である海軍軍令部にとっては、全く異端の発想であった。

日露戦争の後、海軍の仮想敵国が米国と決定してからは、当局がたゆまぬ研究と訓練を積み重ねてきた戦闘方式は、いわゆる邀撃作戦<sup>イウキクセン</sup>だった。

太平洋を越えて進攻してくる米國太平洋艦隊に対して、潜水艦隊や水雷戦隊の夜襲で勢力を削減し、マーシャル群島付近で戦艦を中心の主力決戦を行い、これを撃滅するというもので、日本海海戦の際、対馬沖で長途来攻したバルチック艦隊を全滅させた、過去の栄光の再現を求めるものであった。

すべての戦備や建艦訓練がこの目的に集中されていたが、大正、昭和と時が過ぎるにつれて、この戦略思想は次第に現実から遊離して、硬直した制度に変わっていったよつである。いまこの時点では、対米英戦争は絶対に行つてはならないというのが、山本五十六の信念だったとされるが、しかし状況は刻々と開戦に向けて進行しつづつあった。

もし、どうしても戦えというのなら、長期戦になつたら勝ち目は無い。何としても短期で終結させるしか道はない。そしてそれには従来の邀撃戦法は捨て、開戦当初から思い切つた積極戦法をくり返し、それを勝ち抜きしか方法はないと山本は思い定めていたのである。

つまり周囲の反対を押し切つて強行された眞珠湾攻撃は、

対米戦争に踏み切るなら眞珠湾を攻撃しなければならぬ。それが出来ないならば、この戦争は行つべきではない」という彼の信条に基づくものだった。

だが、この山本の胸中を理解するものは、ごく僅かしかいなかった。

軍令部は、南方の攻略が第一目標で、眞珠湾攻撃は、一時的に敵の侵攻を阻止するための支援作戦と位置づけていた。半年間ほど米太平洋艦隊の活動を遅らせてくれたらそれで充分だ。その間に南方の資源地帯を攻略確保して、長期不敗の態勢が出来上がる。だからハワイへ向かう機動部隊は、奇襲による一撃離脱に徹してほしい。虎の子の空母は一隻も喪わずに戻ってきてくれ……というのが軍令部の肚の中であった。山本五十六の全滅を期して敵を強襲し、勝敗を第一日にて決するという覚悟とは、およそかけ離れた考え方というしかない。

それでも九月十一日から始まつた連合艦隊の図上演習には、山本長官の強い意向で、一般の演習とは切り離した別個の研究が行われた。

九月十六日、関係者だけが集まり別室で開かれた、ハワイ作戦特別図上演習がそれである。

極秘の図上演習は、九月十六日と十七日の二日にわたつて

行われた。

連合艦隊司令部の担当者で攻撃を受け持つ第一航空艦隊の首脳部、それにオプザーバーとして軍令部第一部(作戦担当)のメンバーがひそかに海軍大学内の別棟の会議室に集まった。オアフ島を中心とした日本軍と米軍の双方が、さまざまな條件を想定して対戦するシミュレーションを行ったのである。

航空母艦四隻(赤城・加賀・飛龍・蒼龍)を中心とする機動部隊は、北方からオアフ島に接近する。しかしこの艦隊は、攻撃開始の前日に米軍の哨戒機に発見され、奇襲は成立せず強襲になると想定された。

三六〇機の我が艦載機集団は二波にわかれ、真珠湾軍港を空襲し、戦艦四隻を撃沈、一隻を大破、空母は二隻を撃沈、一隻を大破、重巡洋艦は三隻を撃沈するという戦果をあげるが、一方では米軍の反撃も激しく、我が方の空母二隻が沈没すると判定された。

米軍の攻撃は翌日も続き、第二日目には、我が方の残った空母も一隻が沈没、一隻が大破しついに空母兵力は全滅という結果になった。

図上演習の統監を勤める連合艦隊参謀長の宇垣纏少将はこの判定は敵しすぎると考えて、もう一度やり直すように命じて、米軍の爆撃の命中率を変更させ、ようやく空母一隻が残る判定に落ちつくという一幕もあった。

図上演習の結果は、この作戦がいかに困難かを、改めて認識させるものであった。

あくまで隠密に行動し、なんとしても奇襲を成功させるしかない……というのが立ち会った関係者の一致した印象だったのである。

図上演習が終了して、統監の宇垣参謀長が閉会を告げると、これまで黙って傍聴していた軍令部第一部長の福留繁少将が近づいてきた。

「なあ宇垣、帰る前に少し話したいことがある」

「何だ、もう帰るのか」

「うむ、大体のことが判ったからな。これで失礼する」

「そつか。では隣の部屋が空いているから、そこで待っていてくれ」

宇垣と福留は海軍兵学校四十期の同期生で、軍令部の第一部長の前任者が宇垣であり、また連合艦隊参謀長の前々任者が福留という、共にほとんど同じ職歴を歩む、ごく親しい間柄だった。

図上演習に使われた会議室の隣は、狭い待合室で、丸テーブルが二卓と、五、六脚の椅子があるだけの殺風景な部屋だった。

宇垣が入っていくと、奥のテーブルの向こうに福留が腰か

けていた。

「何だ。話というのは」

向かい合って坐りながら宇垣が尋ねた。

「いや、今のハワイ攻撃のことだが、山本さんは、本当にやる気でののか」

「もちろんだ。だからこうやって討議をしているんだ」

「しかし、空母勢力全滅という結果が出ている。良くて相討ちだ。下手すれば甚大な損害を受けて撃退されるぞ」

福留第一部長は、きびしい評価を下している。

「まあな。そういう観方も出来る。わしがあの時サイコロを振り直させて、空母勢力半減としたのは、いわば格好をつけたわけだからな」

「であれば、GF（連合艦隊）司令部は、この計画を撤回すべきじゃないのか」

「ところがそつはいかん。うちの長官はあくまで強行する肚でいるのだ」

「だからそこがおかしい。開戦となれば、まず南方を攻略して石油を確保するのが先決だ。米太平洋艦隊と対決するのはそつちが片づいてからの話で、最初から二兎を追う余裕なんぞあるわけがない」

「わかつている。軍令部にして見れば、空母を全部南方へ振り向けても、まだ足りないというのだろ」

「その通りだ。だから何としても山本さんを思い留ませるのが、参謀長である貴様の立場じゃないか」

福留は齒に衣を着せずに言い張っている。

宇垣は福留の前に軍令部の第一部長、いわゆる作戦部長を務めているから、部内の動向やその戦略思想を熟知していた。また福留も山本長官の下で参謀長を経験したので、長官の人の柄や考え方を百も承知だった。

その二人が現在では、自分の置かれた立場で、それぞれの主張を述べているのである。

「そつは言っても、うちの長官がこうと思いつめたことを翻えすわけがない。お前もよく知っているはずだ」

「ああわかつている。しかしすでに出師準備は発令され、対米英の作戦計画が具体化しつつあるんだ。それにも関わらず戦略の核心部分が未定とあつては、我々の責任問題じゃないか」

「うむ、だから、その落としどころを探っているんだ」

「それで、貴様の考えはどつなんだ」

福留が問いつめたが、宇垣は直接には答えなかった。

「まあそれより、永野さんはどついうつもりなのか聞きたい」  
軍令部の最高責任者である総長には、今年の四月から、九  
年間在任した伏見宮博恭親王に替わって、永野修身大将が就任している。

「そつだな。総長も次長の伊藤さんも着任して日が浅い。それに積極的に押し通す方じゃないからな。だから俺の意見が反対されることは、まずない」

当然のことに言い切る級友の顔が、宇垣の目前にあった。

丸い、どちらかというと穏やかな顔つきで、鼻下に刈りこんだ髭を蓄えている。しかしその眸には極めて真剣な光が宿っていた。

明治三十七、八年の日露戦争で、ロシア海軍に勝利して以来、米國を仮想敵國として、着々と築き上げてきた日本海軍の軍事戦略が、いよいよ実践の場で験されようとしていた。

ところが、その瀬戸際になって、実戦部隊のトップリーダーである連合艦隊司令長官の山本五十六大將が、これまでの戦略とはまったく異質の、ハワイ攻撃案を強硬に主張していたのである。

軍令部としては何とかが取り下げてほしいだろうが、そうはいかん。とにかく双方が納得する形を見つけたすしかあるまい……。

そつ考えながら宇垣は、調子を和らげて語りかけた。

「お前の気持ちはわかる。わしが第一部長であつても、同じことを言つたろう。とにかく何とか納得出来る形を探るしかない。今夜は時間が空いているか」

「うむ、八時過ぎなら何とかなる」

「じゃ、築地の『菅の家』でどうだ」

「ああ、八時半までに行くよ」

「一人でくるのか」

「そつだな、一課長を連れて行くかも知れんな」

福留はそついい残して席を立つた。

九月十七日は図上演習の打ち合わせが終わつたあと、各艦隊長官の状況報告と会食が行われた。会食が終わり山本長官を送り出してから、宇垣は宿泊している芝の水交社に立ち寄り、私服に着替えてタクシーで築地へ向かつた。

昭和通りから右に折れ、新橋演舞場の前を過ぎて狭い路地に入ると、つき当たりに料亭「菅の家」が瀟洒なたたずまいを見せている。

格子造りの門扉を開けると、さして広くない前庭の植え込みの間に踏み石が並び、その先が玄關になつている。

数多い新橋の料亭の中でも、海軍士官がよく利用する店で、海軍省や軍令部の会合にも時々使われていた。

「お待ちしております」

宇垣が玄關で声をかけると、すぐに仲居なかいが現れ、二階の奥座敷へ案内した。

四畳の次の間の向こうが十畳の部屋で、左奥の床の間の右

側に一枚、左側に二枚の座布団が敷かれている。右側が上座になるが、同期生の気安さで、宇垣は遠慮なく奥の席に腰を据えた。

蓋つきの培じ茶が前に置かれて間もなく、当家の女将おかみが姿を見せた。

「まあ宇垣さん、お久しぶりでございます」

かつては新橋を代表する名妓といわれただけあつて、今でもすらりとした立ち姿に、華やかな風情を残している。

「福留とほかにもう一人ほど来るはずだが」

「ええ、先ほどお電話がありました。お二人で間もなくお見えになります」

「しかし、お女将はちつとも変わらないな」

「あら、お上手うまばかり。もついい年ですよ」

「踊りの方はどうだね」

「馴染みの方々に頼まれてお座敷で踊ることはありますが、舞台上に立つことはございません」

「そうか。いずれその中に、小唄ぶりでも見たいものだな」

話しながら宇垣は、思いついて尋ねた。

「今夜ここに、うちの関係はだれか来ているかな」

「はい。実は下の座敷に、大西さんが見えられています」

「大西たにし瀧治郎か」

「ええ。あとでお呼びしましょうか」

「うむ、声をかけるからと伝えておいてくれ」

大西瀧治郎は、やはり宇垣と兵学校の同期生で、現在は基地航空部隊の第十一航空艦隊参謀長を勤めていた。山本司令官の信任が厚く、航空作戦の第一人者として知られている。丁度いい機会だ。今夜はあいつの意見も聞いて見ようと、宇垣は思い立った。

ではまた後ほど……と女将が引き取ると間を置かずにお連れ様がお見えになりましたと仲居が伝え、福留と第一（作戦）課長の富永定俊大佐が入ってきた。

二人とも右胸に金色の参謀飾緒しやくちを吊るした軍服姿のままである。

「やあ。待たせてすまん」

福留が座布団に座りこむと、富永大佐は畳の上に正座して失礼しますと挨拶した。

「まあ挨拶は抜きにしよう。今夜はクラス会のつもりでいるんだ」

宇垣は富永を座につかせると、つけ加えた。

「おつつけ十一航艦の大西もくることになっている」

「ほう、あいつも呼んだのか」

「いや、たまたまこの家に来ているそうで、声をかけておい

た」  
やがて三人の前に黒塗りの膳部が運ばれ、二人の仲居が銚

子を手にして酌を始めた。

「ああ酒は手酌でやるから結構だ。あんた達は暫く座をはずしてくれんか」

そう言つて宇垣が仲居たちを退らせると、早速、福留が問いかけた。

「なあ宇垣、貴様は現在GF（連合艦隊）の参謀長だ。だから山本長官の意図に従つのが当然だろうが、それはそれとして貴様は、本心であるハワイ攻撃案が成立すると思つているのか」

その言葉には非難めいた響きはない。ありのままの疑問の呈示である。

宇垣は盃を手にしたまま、相対する二人の顔を見つめた。ここは作戦会議の席上ではないので、双方とも一応穏やかに構えている。

しかしその表情の背後には、この型やぶりの作戦計画に対する反論が満ち溢れているのが、手にとるように窺われた。「うむ。わしが参謀長に着任したのは、知つての通り、先月、八月の一日だ。その時初めて、ハワイ攻撃の計画書を見せられたが、正直なところ、まことに驚いたな」

宇垣は質問には直接答えずに言つた。

「そりゃそつだろう。それで貴様はどう受け止めたんだ」

「まず最初の印象は、開戦が必至だとする部内の空気に対す

る、一種の牽制ではないかというものだった」

「といつて」

「いまこの時期、開戦すべきではないとつちの長官は考へている。だから実現が不可能な条件をつきつけたと思つたわけよ」

宇垣が言つと、富永第一課長が尋ねた。

「そのように山本長官が口にされたのでしょうか」

「いや違つ。これはわしの想像に過ぎん。長官はあくまで実現可能と考へておられる」

「いや問題は実施した際の結果です。私は図上演習の判定は甘すぎる。実際はもつと厳しいと思います」

富永は明晰に言い切つた。

面長で額の広い端正な風貌のこの軍令部作戦参謀は、男爵の爵位を持つていて、部内では切れ者で通つていた。

暫くは沈黙が続き、やがて宇垣が口を開いた。

「たしかにこの計画は相当なリスクを伴つ。しかしわしは、成功の確率は決して低くないと考へている。うちの首席参謀の黒島が精魂を傾けて、詳細プランを練り上げたが、なかなかよく出来ているよ」

「といつても、結局はイチかバチかの大博奕には違いあるまい」

福留が口をさし挟んだ。

「まあな。それは否定できん」

宇垣が答えると、三人の間に期せずして軽い笑い声が上がった。

「なあ宇垣。はつきり言わせて貰うが、軍令部としてはこの突拍子もない奇襲計画にはあくまでも反対するつもりだ」

福留はやや改まった口調で言うてから、部下の作戦課長に顔を向けつなずいた。

「では、私から説明させて頂きます」

富永大佐はそう前置してから語り始めた。

「本日の図上演習が示しているとおり、このハワイ攻撃計画は、失敗の確率が極めて高いと見るべきです。理由としては、悪天候の北方航路での燃料補給の困難や機密保持の問題などがあります。何と云っても奇襲の可能性の低いのが最大の難点です」

富永は、低いがよく透る声で話している。

「図上演習では、我が艦隊は攻撃前日の午後、敵の索敵機によつて発見され、無線報告の途中にこれを撃墜したと想定されています。しかしながら現実には、敵の哨戒はさらに一層厳重だと考えねばなりません。長距離爆撃機や大型飛行艇による遠距離の捜索や、潜水艦の哨戒線などを考慮すれば、二、三日前に発見される可能性もあります。もしそうなれば、手ぐすね引いて待ち構える中へ飛び込むわけで、みすみす敵の

術中に陥ることになります」

富永の危惧はもつともだった。あれだけの隻数の艦隊行動が、いかに冬季の北方航路とはいえ、まったく気づかれずにハワイまで行きつけるといふのは、大変虫のいい設定には違いない。

奇襲が成功するどころか、もしハワイ北方海域において、出撃した米太平洋艦隊の全兵力とオアフ島の強大な基地航空戦力の双方を相手に戦つとなれば、結果は火を見るよりも明らかだ。下手をすれば、虎の子の空母が、開戦劈頭に全滅してしまつ……というのが軍令部の一貫した考えのようだった。

「ああ、一課長の言い分に一理はある。しかし奇襲成立の可能性も当然あり得る」

宇垣が言つと、富永は特に感情を交えずに冷静に答えた。

「もちろん、それは確率の問題です。ですがこの件は一国の興亡に関わります。決して僥倖（きやうじやう）に頼るべきではないと考えます」

続いて福留も言葉を添えた。

「そのあたりは山本長官も充分ご存知のはずだ。それでもなお、どうしてもやれと言われる上は、それ相心の根柢があるに違いない。それを責様の口から聞きたいんだ」

福留の言葉は、司令長官を補佐し司令部参謀を統轄する参謀長の責任を問っているのだと宇垣は思った。



「わしは図上演習の統監を勤めていて考えたよ」

言葉を押さえ、ことさらゆっくりと宇垣は語った。

「攻撃開始の前日、ハワイ北方約六〇〇哩の地点で、敵の哨戒機が我が艦隊を発見する。この想定は一応妥当だったと思つた」

福留少将と富永大佐は、酒杯を置いてじつと耳を傾けていた。

「では、敵発見の報告を受けた眞珠湾の米太平洋艦隊が、いかに対応するのだが、わしはそこがヤマ場だと思つた。図上演習では敵の戦艦四隻撃沈、一隻大破。空母二隻撃沈、一隻大破の戦果をあげたが、一方、敵の反撃も激しく、こちらの空母はほぼ全滅という結果だったのは、知つての通りだ」

宇垣は言葉を切つて、向かい合つ二人を見たが、共に黙したままでいるので、そのまま語り続けた。

「さて、現実是一体どうなるかというところ、わしは前日に我が艦隊が発見されても、敵は直ちに有効な反撃態勢を取れまいと見ていた。何しろ開戦の当日、眞珠湾に攻撃をかけようとした本気で計画したものは、これまで誰もいなかった。我々でさえ驚いているんだ。まして米国海軍にとっては、想像を絶した局面に違いない。もしかりに数日前に、何らかの兆候が伝えられても、勘違いだろうと黙殺されるのがオチだ。前日になつて哨戒機から無線報告があつてからも、容易に信じられ

まいし、翌朝までに万全の態勢を整えるのは、極めて困難だろうと思つた。何しろそんな事態への準備や訓練は行われたことがないからな」

宇垣がそこまで言つと、富永大佐が問いかけた。

「つまり、強襲の形になつても、戦略的には奇襲だとおっしゃるのですか」

「その通りだ」

宇垣はうなずいた。

「大型空母のすべてを集中した航空艦隊の編成は、世界に例のない我が国独自のものだ。また艦載機の性能、搭乗員の技倆がどれほど向上しているか、向こうはまだ気づいていない。だからいまこの時期、ハワイ攻撃に投入される空母機動艦隊は、敵の意表をついた、いわば秘密兵器ともいえるんじゃないかな」

宇垣が言葉を切ると、福留が尋ねた。

「では、今日の図上演習は、現実に即応していないと言つたか」

「そつだ。図上演習のルールに従えば、あんな形になるが、実際は、向こうにとってはおよそ予想外の状況で、結局のところはその場しのぎの対応しか出来ないだろう」

「とはいへ、相手は米国太平洋艦隊の全兵力と世界屈指の軍事基地の両方だぞ」

「もちろん、どういつ結果になるかは、やって見なければ判らん。しかしお前たちが心配するほどのことではないと思つ」

宇垣は言い切つた。

「そつか。それが山本さんの主張の根拠というわけだ」

福留はつなずいて、再び盃を取り上げた。

「どうだ、納得して反対は取り下げるか」

宇垣が問い返すと、今度は富永が口を開いた。

「GF司令部の立脚点は、一応わかりました。しかし開戦当初、戦力を分散することにはやはり反対です。下手をすれば二兎を追うことになり、どちらも不十分な結果になります」

富永はあくまで自説を貫く構えだつた。

その時、襖の外から女将が呼びかけた。

「大西さんが、もうそちらへ行っていいかとおっしゃっていませんが」

福留のつなずくを見て、宇垣は答えた。

「ああ、来て貰つて結構だよ」

やがて足音が響き、ガラリと襖ふすまをあけて、第十一航空艦隊の参謀長、大西少将が姿を現した。つき従つた仲居が手早

く膳を据え席を設ける。

目も口も大ぶりの童顔だが、双方の眸には精気が漲つていゝ。飾らない磊落な人柄で、航空士官たちの信望を集めていゝる彼は、海軍航空の育成発展に深く関わつていた。

「おお、富永も来ているのか。まあいい。久しぶりでクラス会だな」

言いながら黒い縞模様の単衣ひとえに袴をつけた大西は、宇垣の脇にとつかと腰を下ろした。

「なあ大西、そつちの方の集まりはもう終わったのか」

宇垣が尋ねると、手酌で一杯あつた大西が答えた。

「ああ終わったよ。いまつちの塚原長官を送り出してきたところだ」

それから彼は正面の二人に語りかけた。

「作戦部長も課長も、軍装のままだな。今日の海大別室の件を、再検討しているのと違つか」

「その通りだ。しかし貴様の十一航空艦は本件には直接関わりがない」

福留が言つと、大西はニヤリと笑つて続けた。

「そりやタテマエはそつだ。この攻撃案は極秘の扱いで、部内でもごく僅かしか関与しておらん。しかし俺は別格だよ。

そもそも山本長官がハワイ奇襲を着想されて、まず俺の意見を求められたのが、今年の一月末だった。以来、折にふれて相談にあずかつているんだ」

「そつか、それで今日の別室の凶演内容も知つていゝるんだな」

「ああ、ひと通りのことは連絡を受けていゝる」

大西は当然のことのように話していた。

「それは好都合だ。どうだ宇垣、先ほどからの検討に大西も加わって貰おうじゃないか」

福留の提案に宇垣が同意すると、富永大佐が、これまでの議論のいきさつを説明した。

「つまり軍令部は、開戦時の真珠湾攻撃は、あくまで反対だということだな」

大西は念を押した。

「そうです。集中と先制は戦略の大原則です。開戦初頭は、全兵力を結集して南方攻略に専念すべきだと考えます」

富永は明快に断言した。

大西はうむ、うむとつなずきながら聞いていたが、富永が語り終え、福留が貴様の意見を聞きたいと言つと、少し考えてから口を切った。

「俺の第十一航艦は現在、台湾の各基地に展開している。相手はもちろん、フィリピンの米空軍だ。ルソン島上陸作戦の前に、何としてもこいつを潰してしまわねばならん。だからこれまで研究を重ねてきたが、やはり基地航空戦力だけでは無理だという結論になった」

大西は言葉を切つて、三人の顔を眺め渡した。

「うむ、それは知っている」

宇垣が言つと大西は続けた。

「これはひとつには、航空撃滅戦の主戦力である零式艦戦れいしきの

航続力の問題だ。あれは戦闘機にしては、ずば抜けた脚の長さを持つているが、それでも台湾と比島を往復するのは、かなりキツイ。だからぜひ空母の協力がほしいと上申しているんだ」

そのあたりの事情は、この席にいる三人は一応承知していた。

「それで零式艦戦の航続距離延長の訓練をやっているそうだな」

福留が尋ねた。

「そうなんだ。ルソン島のクラーク航空基地群の上で、少なくとも十五分間の空戦時間がほしい。それを稼ぎ出すために、落下増槽を大きくしたり、海上でのエンジン回転数を最小限に押さえたり、あらゆる工夫を重ねているところだ」

その時、富永大佐が質問した。

「訓練の成果はいかがですか」

「ああ、Aクラスの搭乗員は、ほぼ目標を達成している。だがBCクラスはまだまだだ。全体的のレベルアップには、あと二ヶ月半はかかる見通しだよ」

言い終わると大西は、手酌で二杯続けて杯を傾けた。

「それで空母を南方にむけてほしいというのだな」

福留が水を向けると、大西は答えた。

「むろん、それに越したことはない。なにしろ小型の龍驤りゅうしょう

一隻では何とも心許ない。あれは搭載機がせいぜいで四〇機だ」

「そのためにも、ハワイ攻撃は中止すべきだろう」

福留が言うと大西は左手を振った。

「そりゃ無理だな。山本さんは絶対あきらめはせんよ」

大西の言葉で一同は沈黙した。山本GF長官の強固な意志は、四人とも知り抜いている。

「さて何か方法がないものかな」

福留がぼつりと呟くと、宇垣が受けた。

「これはいわば妥協案だが……」

前置きして宇垣は語り始めた。

「九月一日に正規空母の翔鶴（しょうかく）が就役して、第五航空戦隊が開設された。もう一隻の同型艦瑞鶴（ずいかく）も今月末に就役するはずだ。どうだろう、その二隻を南方作戦に廻して、第一、二航戦の空母四隻でハワイ作戦を実施するというのは」

「うむ、そのあたりが落とし所かも知れんな」

福留が言つと、まあ妥当な線でしょうと富永が続けた。

「大西どうだ」

宇垣が尋ねると大西は腕を組んだ。

「五航戦のことは知っている。艦は最新鋭で赤城や加賀以上の性能だ。しかし乗務員やパイロットの練成は、そう簡単にはいかん。こちらの方は三ヶ月以上かかるだろう。そうなる

と、問題は開戦の時期ということになる」

たしかに戦備は急ピッチで進められているものの、時間との闘いというのが現状だった。

「いまのところは、戦備完了の目途（めど）は十一月上旬とされているが、とても間に合わんな」

福留の言葉を宇垣が受けた。

「GFでは、戦備全般の進行からして、十二月上旬まですらそうと考えている」

「そりゃ絶対に必要だ。何としてもあと三ヶ月の余裕がほしいな」

大西も強調していた。

空母二隻を南方作戦にふり向けるという宇垣の案が、いわば緩衝材となり論議は何とか形をなしてきた様子だった。

「どうだ。そろそろ綺麗どころを呼ぶか」

宇垣の言葉を福留が押さえた。

「もうちょっと待て、いい機会だから、こいつの考えも聞いておきたい」

そう言つて大西に尋ねた。

「このハワイ攻撃案を、貴様は一体どう思っているんだ」

大西は右手の盃を一気に呑み干して膳の上に戻し、ゆっくり微笑んだ。

「一月の末に、山本長官からぶ厚い手紙が届いた。それが事

の始まりだ」

彼は語り始めた。

「何しろ開戦と同時に、空母艦載機の全力をもって真珠湾軍港を襲撃するというんだからな。さすがの俺も驚いたよ。だが同時に、山本さんは我が航空戦力の実情をよくご存知だと思つた。遠く三〇〇〇哩彼方の敵の本拠地を、先制攻撃するというのは、つい先ごろまでは夢物語りでしかなかったが、それが実現できるまでに、我が戦力は向上しているんだ」

大西は言葉を切つて聞き手の反応を確かめ、再び続けた。

「このことは海軍部内でも、航空関係以外にはよく判つていない。まあそれほど、進歩発展が早かつたとも言えるだろう。まして米國海軍は、まったく予期してはいないはずだ。つまりそれが山本さんのツケ目だと思つんだ。」

昨年の五月、ヨーロッパ戦線では、ドイツの電撃戦によって、フランスが僅か一ヶ月半で降伏してしまつた。これは戦車兵力を結集して、敵の後方深くへ侵攻するという画期的な戦法が見事に成功したからだ。

いま我が海軍で編成された空母機動部隊は、まさにそのヒトラーの装甲軍団に相当する。アメリカにもイギリスにも、まだこの発想はない。正規空母六隻に、新鋭の艦載機と熟練した搭乗員を組み合わせたら、その破壊力たるや大変なものだ。これこそ世界の海軍戦略を一変させる革命的な戦力なん

だ」

日本海軍の航空兵力の発達に、多大の貢献を果たしてきた大西瀧治郎の語り口は、次第に熱を帯びてきた。

だが大西は、ここで少し調子を押さえて続けた。

「ただしこの優越性は永くは続かないと思つ。相手もバカじゃない。すぐにこちらを真似て、さらに強力な空母戦力を立ち上げるだろう。だからせいぜい一年か一年半が限界だ。その間にこの新戦力をいかに使用するかが、勝負どころだと俺は考えている」

大西は語り終えて、酒盃を手にした。

「うむ、貴様の口から聞くと、さすがに説得力がある。それでハワイ攻撃案に対する意見はどうなんだ」

福留はなおも追求した。

「俺はな。山本さんには充分やれますと返事を書いた。そして具体的な研究は、一航艦の源田実が適任だと推薦しておいた。だから山本さんの気持ちはよく判る。相手が何も気づかないうちが最も有利だとすれば、それは開戦時だ。また南方に転用すれば、ジャワ島攻略終了までに、かなりの損耗は避けられない。いざ艦隊決戦という時に航空戦力激減という事態を一番心配されていると思つんだ」

大西が言葉を切ると、宇垣が引き取つた。

「大西の言つ通りだ。うちの長官は第一機動部隊の用法に、

格別の重点を置いておられる」

大西は宇垣に「うなずきながら言った。

「だが、俺は山本さんとは少し考え方が違う。他にもっと有効な使い方があるはずだ。開戦時に奇襲するのは、いわば騙し討ちに近い。下手をすれば、相手を徹底的に怒らせ、短期の戦争終結が困難になる。だからなるべく避けたほうがいいと思っっている」

「では、この攻撃案に反対なんだな」

福留の言葉に大西も「うなずいた。

「そつだ。開戦時の奇襲は避けるべきだ」

「よし判った」

大西の考えが示されたところで、これまで続いた論議は一応終了した。

宇垣は襖を開け廊下へ出て、階下へ向かって声をかけた。

「おい、話し合いが終わったぞ。皆来てくれ」

「ハイ、只今」

下からは、なまめかしい声が返ってきた。

宇垣は脇にはべっている年増<sup>としず</sup>芸者から酌を受けながら、想いに耽<sup>た</sup>っていた。

隣の太西が、洪い声で小唄の「虫の音<sup>むしのね</sup>」を唄い、若手の芸者衆がそれに合わせて、小唄ぶりを踊っている。

虫の音を止めて嬉しき庭伝い  
開くる柴折戸、桐一葉……

三味線と唄声がよく融け合って、季節に合わせた小唄は、なかなかの出来栄であった。

「大西閣下は、随分ご上達ですね」

脇の年増が言う。

「そつだよ、あいつは見かけよりよほどカンがいい。飛行機の操縦も、すぐに覚えたそつだ」

言いながら宇垣は、向かい合った二人に視線を移した。福留と富永は、踊りなどそつちのので、顔を寄せて何か囁き交わっていた。

軍令部は、あくまでハワイ攻撃案を阻止する気である……という宇垣の観測は、今夜のやりとりで証明された形だった。うちの長官の決意を変えるのは、容易でないことを連中もよく知っている。だから四方八方をじわじわと固めているようだ。決め手は、当事者である第一航空艦隊司令部だろうと宇垣は見ていた。

今年の四月、新たに第一航空艦隊が設立された。

空母、赤城と加賀で第一航空戦隊。飛龍と蒼龍で第二戦隊を形成し、いずれそこへ、翔鶴、瑞鶴の第五戦隊が加わるこ

とになっている。つまり日本海軍の六隻の大型正規空母はすべて、この第一航空艦隊に集められていた。

この空母群を統括指揮する司令長官には、水雷戦術の権威として知られている南雲忠一中将が任命された。

しかしこの人事異動には、うちの長官は不本意だったらしいと宇垣は思っている。

そもそも航空母艦の集中運用を考えたのは、現在南遣艦隊の長官に内定している小沢治三郎中将だった。小沢は航空戦に理解が深く、独得の戦術観の持主で、このようなまったく新しい発想の空母集団の指揮官にはうってつけだと期待されていたようだ。

ところが発表された長官人事は、南雲中将で、これはGF司令部内でも不評だったと聞いている。

だが戦備は着々と進行している。いまさら長官の変更はあり得ない。そしてその第一航空艦司令部に、軍令部が目を付けている様子だった。

もしも小沢中将が司令官であれば、状況は一変している。空母集中の発案者であり、航空戦術について独自の考えを持っている。必ずうちの長官の意図を汲んで、革新的な戦法を展開するだろう。ましてハワイ攻撃に戻りこみするはずがない。

ところがどうだ。現状、南雲長官と参謀長の草鹿龍之介少

将の態度は、何とも煮え切らないものだった。

今日の図上演習にしても、肝心の第一航空艦司令部の反応が、どうも冴えない。

草鹿参謀長は、何度か質問や意見を述べてはいたが、ごくおざなりのものだし、南雲長官に至っては、ひと言の発言もなかった。

いわば傍観者の姿勢であって、当事者の熱意や意気込みが、ほとんど感じられなかったのである。

いずれ本件は取り下げられるだろうと、タカを括っているようにさえ思われた。南雲長官は以前に軍令部勤務の経験があり、現在の作戦課とツーカーの仲だ。とにかく、ハワイ攻撃反対に関しては、双方の呼吸はぴったり合っていると宇垣は観測していた。

「おい宇垣、お前も一曲唄ったらどうだ」

大西が隣から声をかけた。

「まあ嬉しい。久しぶりで閣下の名調子をお聞き出来るわ」  
脇の綺麗どころも、調子を合わせている。

三味線は何でも弾きこなすウエテランのお姐さんだった。  
「よし、では白頭山ぶしをやるさう」

「踊りもつけますか」

「いや、唄だけでいい」

宇垣は座り直して、やおら唄い始めた。正面の二人も話しを止めて耳を傾けている。

「白頭み山に、テンツルシャン 積もりし雪は、

融けて流れて、アリナレの……」

自己流のかなり怪しい節廻しだが、とにかく一曲唄い終えると、拍手がきて、芸者衆たちは、口々に褒め言葉を並べてくれた。

「それでは我々は、これで失敬する」

汐どきと見たらしく、福留が腰を上げた。

「富永大佐も、失礼しましたと両手をつけてから席を立つた。

「送つては出んぞ」

「ああ、そのまま結構だ。二十四日の軍令部の打ち合わせ

会で、また逢おう」

福留はそう言つて、富永を伴つて立ち去つた。

「さて、これからゆっくり呑み直すとするか」

二人差し向かいに席が改められ、あなたたちは「苦勞だったと芸者衆を引きとらせると、大西は手酌で酒盃を満たしながら言つた。

「なあ宇垣、お前も何かと氣苦勞なことだな」

「うむ、まあなあ」

「山本さんとお前の間がしっくりいかんのは、俺もよく知っている。あの人は随分と好き嫌いがあるからな」

「いや、氣が合う合はんは、どうしようもない。わしはこゝは、裏方に徹しようと思つてゐるよ」

GF司令部の中では、山本長官の就任以来、もう二年以上首席參謀を勤める黒島龜人大佐が、実権を握つていた。

変人參謀とか、仙人參謀とか渾名のある一風変わった個性の持主だが、このハワイ攻撃という常識はずれの計画の立案には、まさに適任だったといえよう。とにかく長官の全幅の信頼を得ているのは確かだった。

一方、宇垣の方は、八月一日に着任してまだ日が浅いせいもあるが、司令部内では、いわば浮き上がった立場にいた。

四月に人事部から、參謀長にと内示があつたのを山本が断わり、八月に再び提示され、ようやく就任の運びになつたいきさつは、司令部内に知れ渡つていた。

なぜ長官が自分を敬遠しているのか、宇垣にはわからなかつた。

山本長官が海軍次官だつた頃、身体を張つてまで阻止しようとした日独伊の三国同盟に対して、当時の自分が、同盟締結の賛成派であつたと誤解されているらしい。

たしかに三年間ドイツに駐在した経歴がある。しかし決し



てドイツびいきでもなく、三国同盟の熱心な推進派でもなかった。

だが、いまさらそんな言い訳をしても始まらない。好悪の感情など超越して、参謀長としての責務をまっとうするだけだと、宇垣は思い定めていたのである。

「しかしな、俺がハワイ攻撃に反対するのは、何も空母を廻してほしいからじゃないんだ」

しばらく沈黙が続いてから、大西が低く押し出すように言った。

「ごむ」

宇垣はゆっくりとつなずいた。

「じゃ、お前にはわかるのか」

「ああ、わかる。空母機動部隊の司令長官が不適任だからだろ」

「その通りだ」

大西は膝を叩いて言った。

「もしも司令長官が小沢治三郎であれば、俺は手をあげて賛成するよ。開戦劈頭、ハワイ海域で米太平洋艦隊に、真正面から決戦を挑むんだ。まさに千載一遇の機会じゃないか」

大西の言葉は、一段と熱を帯びてきた。

「いいか宇垣、六隻の正規空母の搭載機は、最新鋭の零式艦

戦を始め、世界一流の九七式艦攻、九九式艦爆併せて約四〇〇機だぞ。しかも搭乗員は、鍛え上げたヴェテランが揃っている。これがどれだけの力を持っているか、航空関係者以外は、とても理解出来まい。

例えば零式艦戦だ。俺は去年まで大陸で、航空隊の司令官をやっていたが、その時に送られてきた零式戦は、まさに向かうところ敵なしだった。いま米軍の最新鋭は、グラマンF4Fだが、俺は零式戦一機で、グラマン三機に充分対抗出来るで見ているよ。」

大西は、意気たるべからざる勢いだった。

「お前の話だと、図上演習の結果もかなり変わってくるな」

宇垣の言葉に大西は答えた。

「当たり前だ。演習では敵味方の戦闘能力が、ほぼ同一と想定されている。それであんな結果になるんだ。実戦となれば、技術や性能の差がモロに出てくる。」

「では、もしお前がこの作戦を指揮したら、どんな戦<sup>いく</sup>をやって見せる気だ」

宇垣が水を向けると、大西は居すまいを直した。

「そつさな。いま我が海軍の中で、数百機という航空機集団を自由に操り統御出来るのは、三人しかおらんよ」

大西は胸を張って言う。

「まず第一は小沢さんだ。次は二航戦の司令官をやっている

同期の山口多聞<sup>たもん</sup>、三番目がこの俺<sup>おれ</sup>だな」

「南雲さんには、やれんか」

「ああ、とても無理だ」

大西はあっさり言つてのけた。

「参謀長の草鹿や、航空参謀の源田実がついていてもか」

「そつだよ、あの二人は航空戦闘に詳しい。だがな、参謀はあくまでも補佐役だ。とんとん拍子で進んでいる時は、参謀に任せておけばそれでいい。しかし、もしも死地に陥つた場合は、そうはいかん。例えばだ。兵力の半分を切り捨てにやならん場合に、ぶつかったとしよ。そんな時に、眉ひとつ動かさず、決断出来ないようでは、こちらが全滅してしまふ。南雲さんは、そんなカンも度胸も持っていない。だからダメなんだ」

大西の主張には、宇垣も同感されるころあつた。

南雲長官が任命されたのは、四月初旬だつた。その時点で、ハワイ攻撃案は内示されている。

航空戦に自信があれば、今ごろはとつとくに、適切な作戦計画が完成しているはずだつた。ところが現場では、今なお腰の引けた状態が続いていたのである。

「もし俺に一切まかせてくれるならばだ。それこそ世界の海戦史に残るような戦をちつて見せるよ」

大西はニヤリと笑いながら銚子を振つて酒が切れたぞと言

つた。

立ち上がったて襖を開け、冷やでいいから持つてこいと註文すると、すぐに五合は入りそつな陶器の酒器と、大ぶりのぐい呑が二箇届けられた。

「まだ飲む気か」

「ああ、今夜はここで泊つてもいいな。久しぶりで飲み明かそうじゃないか」

大西はテコでも動きそつにない。仕方がないヤツだと言いながら、宇垣も腰を据えた。

「それじゃ、お前の海戦史に残る戦闘というのを、具体的に聞かせて貰おうか」

宇垣が求めると、大西はなみなみと注いだぐい呑みを、ゆつくり傾けて言つた。

「まあそつ急ぐな。秋の夜長だからな。ゆるゆる語るとしよつ」

しかしながら、なぜこの時期にこいつを、基地航空隊の参謀長に任命したのだらつと、宇垣は思つた。

草鹿龍之介の替わりに、第一航空艦隊の参謀長をやらせるべきだ。前人未踏のハワイ遠征作戦に自信が持てず、尻こみしている南雲長官を叱咤激励するにはつてつた……。

「いいか、よく聞け」  
グイ呑みを持つた右腕をまくり上げて、大西は語り出した。

「図上演習では、攻撃前日の午後、敵の哨戒機が我が艦隊を発見する。翌日未明、我が艦載機の大編隊は、全力をもって真珠湾を空襲、在泊する米太平洋艦隊を襲撃して多大の戦果をあげる……。大体、こんな想定だったよつだな」

「その通りだ」

「だがな、その判断は間違っているよ。もちろん突然、敵大艦隊発見の報告を受ければ、敵サンはあわてふためくだろうが、対応する時間は充分あるんだ。日本軍の攻撃開始は翌朝以降だから、真珠湾内の艦艇はすべて出撃するに決まっている。従つて当日は、米太平洋艦隊の全兵力プラス五〇〇機の基地航空部隊を相手に、ハワイ北方海域で一大決戦が展開されることになる」

大西はグイ呑みを膳に戻し、左の腕もまくり上げた。

「十年、兵を養うは、ただ一日これを用うるが為なり、といふ。どうだ。まさに男子の本懐これに過ぐるはなし……じやないか」

彼はまるで歌つように言った。

「それでどうだ。我が方に勝算があるのか」

「ああ、あるとも」

大西は無造作に言う。

「これまでの艦隊決戦の研究とは、およそ次元が違う。航空戦の視点に立てば、相手の主役は二隻の正規空母だ。現状で

は、レキシントン、サラトガ、エンタープライズが米太平洋艦隊に配属されている。搭載機は併せて二四〇機だ。こいつとにかに渡り合つかが、最大のポイントだよ。

あとは脇役として、オアフ島の基地航空兵力がある。これは約五〇〇機と数が多いが、実際に二二三〇機向この空母機動部隊を攻撃するとなると、多大の困難に直面することになる。使用可能な機種は、飛行艇一〇機、陸軍の爆撃機一五〇機などで、この中の四〇機ほどが四発の大型機だ。しかし陸軍機は長時間の海上飛行が苦手で、攻撃も水平爆撃だけだから、命中率は極めて低い。だから陸上からの航空攻撃は、さほど脅威ではないんだ。

つまり実質的な対戦相手は、敵空母にしぼられるが、これも三隻はらばらに、戦艦部隊に配属されているので、集中と連撃に弱味がある。まあこのあたりが、こちらのつけ目だな。

まず第一にオアフ島の航空基地を叩く、撃ち洩らしたやつへの攻撃を適宜あしらいながら、敵艦隊を可能な限り島から離れたところへおびき出す。そこで三隻の空母を個別に潰してしまえば、あとはもうこちらのものだ。残った戦艦や巡洋艦は、何でも料理して見せるよ」

大西はほとんど一息に喋り続けた。

なるほど、こいつの頭の中では、航空戦闘の様々なパターンが、絶えず組み立てられていると、宇垣は醒めた目で見て

いた。

大西に代表される海軍航空の士官たちは、自信過剰で鼻っ柱の強いことにかけては、定評があった。たしかに零戦艦戦は、画期的な性能を備えている。最初の十五機が大陸戦線へ進出した時、重慶や成都で一方的な戦果を挙げ、我が方の損害は皆無だったことも承知している。

しかしながら今度の相手は、世界一流の米軍の航空隊だ。果して零式艦戦は無敵だという評価が、そのまま通用するだろうか……。

宇垣の危愆を見通したように、大西の語調が少し変わってきた。

「しかし、こちらにも弱みがある。機材にしても人員にしても、すべてワンセットだけで、スペアがないんだ。層の薄さ、余裕のなさが現地にいると身にしてみるよ。山本さんは、開戦するなら、零式戦と一式陸攻の各一〇〇〇機が、絶対に必要だと言われたが、俺もつくづくそう思うよ。」

大西はそれから、据わった両眼を向けた。

「なあ宇垣、無いものねだりをしても始まらないよ。艦戦や陸攻の数にしても、指揮官の適、不適にしてもだ。我々は与えられた条件の中で、やれるだけのことをやるしかないんだ」「おいおい、少し飲み過ぎたようだな。妙に愚痴っぽくなつたぞ。」

宇垣は気を引き立たせようと声をかけた。

「うん、お前の言う通りだ。少々疲れが出たらしい。しかし寝る前にもう一度言つが俺はやはりハワイ攻撃には反対だ。あれだけの重荷を南雲さんに押しつけるのは、絶対に無理だ。失敗するに決まっている。だから何とか山本さんを説得するしかあるまい……」

言いながら、大西の頭は次第に前に垂れてきた。

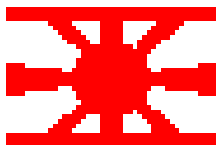
「おい大西。眠るなら横になつたらどうだ」

「ああ、そうしよう」

顔を上げた大西は、大きくあくびをすると、そのままころりと横になつた。

やがて肘まくらしたその口から、規則のないびぎが洩れ出した。

未完



旧帝国海軍少将旗

# ちえのわ

榎 本 笹太郎

「沼崎さん、お食事です。どちらで召し上がりますか。食堂にしますか、それともお部屋にしますか？」

「どちらでもいいわ。それどう違つて？」

「歩ける人は皆さん食堂で食べてます。歩けない人は部屋でもいいですよ」

「ああそうなの。歩けるけど今日は初めてだから、お部屋にしておくわ。いいかしら？」

「はい、じゃこれね」

と言って配膳トレイをベッドサイドのオーバーテーブルの上にポイと置いた。ガシャと音を立てたが汁がこぼれることは無かった。一瞬公子の顔色が変わり驚いた様な目目で看護助手の岡野しげ子を見上げた。同時に

「あらごめんなさいね。皆さん待ってるんで。忙しいわ」と言つて岡野は部屋を出た。部屋にはオーバーテーブルの上

に、いくつがずれて並べられたプラスチックの食器を乗せ、斜めに投げ置かれた小さいな長四角のトレイが残つた。公子は暫く箸をつけることができなかつた。涙が静かに頬をつたつた。

「お早うございます。朝食です。沼崎さん、昨日の夕飯大分残したのね、大丈夫？ 具合悪いことない？ あれば遠慮なくゆつて下さいね。ところで今日、朝ご飯の後十時ごろからラウンジでお茶会があるので、その時声かけるから参加して下さいね」

公子は昨日のこともあり助手望月の手元を見つめていた。質問はされたものの、公子は咄嗟には考えが纏まらず口こもつているうちに望月は、じゃあネと行つてしまつた。その日の午前十時に各部屋から歩ける者は歩き、かなわぬ人は車いすに押されて三々五々病棟の東端にありピアノ、パーカウスター、ソファなどが設えてあるラウンジに集合し始めた。公子も再度促され、パジャマで人前に出るのは如何なものかと思案したが軽く着替えて出席することにした。

ここにきて腰痛は執拗であり、公子は廊下の手すりにまさに手を擦るようにしてゆつくりと歩み、廊下の他端にあるラウンジのソファに腰をおろした。見渡すと十人程の患者がソファに座り、互いに視線を合わせることなく各自静かに茶を

すすっていた。

すると一人の愛想のいい看護師飯塚玲子が

「まあ！沼崎さん、赤い服がとつても似合つよ！若いのねえ。皆さんこの方は昨日いらつしやいました。皆さんの後輩です。よろしくお願いします。はい沼崎さんご挨拶」

ソファは軟らかかったが、腰椎の背側突起が背もたれに触れる度に、ウツとする痛みが腰から臀部にかけて走つた。何で私がこの看護師を孤立させないようにここで張りきらなければならぬのか、合点がいかない。今はそこまで自分に余裕が無い。

「よろしく」

と小さく言つて手に持つたお茶碗を少しもち上げた。申訳なかつたが、ここでおどけて見せるのはいかにも自分らしくないと公子は思った。とは言え公子は自分らしさなどという事は改めて考えたこともなかつたのではあるが。

飯田公子は茨城県の緑多き中堅農家の長女として生まれた。利発であつた母の血を受け継ぎ、小、中学校では優等生であることを持続した。自給自足を旨とする農家の生活である長女として子供の頃から母親の家事料理の手伝いをした。苦ではなかつた。その頃から彼女の意識の裏側では与えられる喜びの下で与えることの喜びが少しずつ芽吹き始めていた。

地元の高等学校を卒業後都会に憧れ、東京の大学家政学科へ進学し栄養士を目指した。卒業後は都内の病院で栄養士として修練を重ねた。数年後、管理栄養士試験の難関を突破し免許を取得し、主任補佐となつた。

一方、公子は自ら料理することもよなくこれを愛した。またそれ故に自らも食を愛すること、他を凌駕した。

彼女にとつて食は、たしなみであり教養であり文化であり愛情の表現でもあつた。それはゆるがせにできない何か必須のものであつた。一定の経験を積んだ後、地元に戻り地方公務員の定夫と結婚し沼崎姓となつた。夫が勤務する地方都市の小病院の管理栄養士となり、患者の食事を栄養面から管理指導する傍ら自ら実技も指導した。定夫は右腕に黒木綿の腕抜きをはめ、ひたすらそろばん（晩年は簡単な計算機を使つたが）と帳簿に向かう半生であつた。子を授かり両親を送るなど通常の生き様の中で小さい幸福感は常に有つた。

夫の定年に遅れること数年で公子も退職し、その後は請われるまま地方の介護士養成の専門学校での調理実習担当の教員補佐として、特に調理実習の際の実技担当として腕を振るい、数年の間働いた。若い男女にミキサー食、ペースト食、トクミ食などの作り方を教えた。単なる練食の作り方ではなく、如何に練り食であつてもご馳走として味を調えるか、その腐心の実を語つた。生徒たちは何が何グラム、何が茶さじ何杯

などという、教科書改訂実践栄養学の記載は音楽の音符であり、読んでも解らない異国の言葉であった。これを翻訳し演奏して見せると生徒たちの目は輝いた。この輝きを見るのが好きであった。この輝きこそ公子が戦後の混乱期、母の手助けをした際に見せた母の目の光でもあった。

「先生のものよりうちのお母さんの方がおいしいよ」

「そりゃそつだよ、お母さんって偉いね。でも今日だけは授業の通りやってね。お願いだから」

公子は学生を採点する立場にはなかつた。そのためか意外にも学生に人気があった。しかしながらこうした授業も程なく終了し、夫に遅れること六年にして完全なる定年を迎えた。定年後は子供たちも家を出て、あとは何の変哲もない田舎の二人暮らしであった。近所の農家から数坪の土地を借り、自宅の小スペースと併せて花作りと家庭菜園を楽しんだ。定夫も町方の出ではあったがよくこれを助けた。

公子は、半ばは夫のため半ばは自らのために、せつせと料理をつくりささやかながら心ある食生活を楽しんでた。つくし、つわぶきの若茎のほろ苦さに春を求め、風が吹いては折れた枝にきくらげを探した。初夏にはふきの葉の佃煮、柿の葉、タラの芽のてんぷら、夏は梅干しを漬けプランターを利用したミニ菜園から少量の緑と香りを頂いた。

秋には家の境界のフェンスに絡ませたブドウから少量の恵

みを愛で、冬は漬物で少ない緑を補った。質素ではあったが季節の滔々とした廻りに、がっちり歯車がかみ合った生活であった。求めなければ心がゆとり、これでよいと思えば心は安住する、亡き母の口癖でもあった。

夫婦の前で時計の針が動きを止め、時の流れは息を潜めて佇んだ。二人は、ああ、これが人生であり天命なのであるう、そう思った。

そんなある朝、公子は下着に不正出血があることに気がついた。昨夜のことが原因であったかも知れない、いやきつとそうに違いなれないと思ひ様子を見た。それは消失したり再発したりを繰り返して、一向に完治する気配もなく、それどころか心なしか量が増してきた気もする。そう思えば下腹部と腰背部に鈍痛も覚えるようになってきた。このことを夕食の際、何気なく夫に話した。ビールのコップを運ぶ定夫の手が口元で止まり、その手をテーブルの上に慌てて戻しながら

「えっ！　なんだってそんなこと隠してたんだ」

「隠してなんかいませんよ。様子をみてたのよ」

「君だつて昔は病院関係者だつたじゃないか。怖いことなんかないだろ」

病院が怖いわけじゃない、医者が怖いわけじゃない、自身の将来について他人から指図されて流されざるを得なく

なる、その可能性が怖い。その宣告に自分の努力は関与できない、そのことが恐ろしいのである。突然個人に襲いかかるこの理不尽さが何とも空恐ろしく思われたのである。

「そうね、明日早速いつてみるわ」

止まっていた時計の針が再び大きな音を刻み動き出した。

「一緒に行こうか」

「あなたは気が弱いからだめよ、来ないほうがいいわ」

「……………」

翌日、公子は近所の婦人科を受診した。激務から既に産科を廃業した医院であり患者の数にも限度があった。それ程待たされずに順番がきた。

「沼崎さん、沼崎公子さん。どうぞお入り下さい。どうしましたか？ 先生にお話し下さい」

若い外来看護師に促され、公子はかい摘まんで事の経過を話した。

「分かりました。では診させて頂きましょう。用意して診察台のほうへ、どうぞ。」

診察への準備をしながらこの年になって何を今更と自らに言い聞かせてはみたものの、何ともおぞましい気持ちは拭い切れなかった。がしかし看護師の介助もあり内診を終えた。その後初老の婦人科医は浮かぬ顔をして

「じゃ今度は超音波をやってみましょう。こちらに移って下

さい。痛い検査ではありませんから。すぐ終わりますよ」

再度指示されるままに低ベッドに移り、今度は下着をさげて下腹部を露出した。

「ジェリーを付けます。ちょっと冷たいですよ。こちらの画面を見てください。お腹が映りますよ」

「先生、子宮ってどんな形してるんですか？」

「膨らます前のゴム風船のようです。ですから超音波ビームの切り口によって色々な形に見えますよ」

と言いながら、医師はプローベをジェリーでぬるぬるする公子の下腹部の上を滑らせた。

「はい、ここが……………」

と言われたので画面を見たが、壊れたテレビのようにただ漠とした白い光の塊のようなものが見えただけであった。良く分からないので、と質問しようとした矢先、医師はパチンとスイッチを切ってしまった。

「いやどうも、うちの機械もかなり古いものだからアーチファクトが多くてやりきれませんわ」

「アーチファクトって？」

「雑音です、ラジオで言えばガーガーピーピーですよ。診断に支障、大ありつてえところですね。いいです、大病院紹介しますから。紹介状を渡しますから御主人呼んでいただいでいいですか？」



何を言ってるんの、はつきりゆって欲しいわ、いいも悪いも無いじゃない、と思いなながら

「必要があるなら呼びますけど」

と答へ、電話器のある待合室へ向かった。

数人の患者の診察が終わった頃、定夫が到着した。一人診察室に呼ばれ短い会話の後紹介状が渡され二人は帰路に着いた。紹介された大病院でも同様の検査診察が施行され、骨盤腔内に広がる腫瘍陰影が証明された。恐らくは子宮原発の末期がんであることも二人に告げられた。

手術は選択されず放射線療法と化学療法が施行された。が程無く肺と小脳に転移が発見され恐らくは全身転移があるであろうとの判断から、治療方針の百八十度転換が提案され決定された。すなわち医師から夫に対して余命はほぼ半年程度であろう、従って残りの人生はホスピスなどで有意義に過ごすには如何か、との提案があった。日頃から口数も少なく、主張することの苦手な夫にとつても、治療の放棄を意味するそれは直ちには受け入れ難いものであったが、いずれにしてもここではこれ以上治療はできない、との結論は動かしようもなく、得心のゆかぬまま転院退院を首肯せざるを得なかつた。

いくつか候補施設の紹介も受けたが、看病、身辺介護のため、そして定夫にとっては何よりも治療のため、ただただ毎

日通院してあげたい、そのために東京ではなく地元のホスピスを選んだ。他意はなかつた。

病院について多少の情報は持っていたがホスピスに関しては皆無であつた。病気の性格上闇雲に聞き廻ることもできず、近くの内科クリニックを受診する形で訪ねてみた。すると快くとなり町（現実的には市であるが）の某病院を紹介してくれた。疲れも限界に近く一日家でゆっくり休みをとり、翌々日紹介状をもちその病院のソーシャルワーカーに見学のための案内を請うた。病室は一間ではあつたが小さな炊事スペースとトイレがあり、部屋には大型のテレビと小さいソファがしつらえてあつた。廊下は板張りで毎日の清掃が行き届き塵の一つも見られなかつた。公子は躊躇なく決めた。自分の回復を託す場所としてここに決めた。

入院の前後には腫瘍の脊椎転移のためであるう、両下肢の動きが悪くなり始めて車いすを利用することが多くなつていった。体の不如意さに逆比例するかのようにつ公子の感受性は鋭敏となつた。

看護助手が配膳の際に、音をたててトレイを投げてよこした事がいかにも心にこたえた。病院の食事は費用が制限される中で、栄養も味も見た目も満足し得るものでなければならぬ。苦勞は痛いほど良く分かる。食器がプラスチックで

あることも仕方あるまい。だけど如何に私が大病したからと言って私も犬や乞食ではない、投げ与えられた食事を素直には食べられる訳がないのである。その事を注意はしてみたが、はあ？ という答えが虚しく公子の胸底に届くばかりであった。後で見舞いにきた定夫に涙ながらに事の顛末を語った。定夫は公子の涙を忘れていた程であり余程の事と感得した。

夫定夫はかねてより頼れる妻の言う事を疑うことはなく、その傾向は自らの定年以後尚更であった。そして二人しての夕餉の際、妻がよく

「こつして少し飲みながら食べられるつちが華ね。口から食べられなくなったらおしまいだよ」と繰り返すことが多く、定夫もその都度

「そだね」

と、これまた決まって同じように相槌を打つのであった。このように公子の訴え事は、疑われることもなく素直に定夫の耳に届いたのであった。

後日、当番であった看護助手が看護師長に呼び出された。

「あなた先日患者さまに食事を投げつけたって本当？」

「まさか師長さん、そんなことしませんよ。だいいちご飯が載っているお盆をどうやって投げれるんですか？ 無理ですよ、お汁がこぼれちゃっじやないですか。」

部屋の扉が開まっているときは、右手ひとつでトレイを持ち、左手でドアを開ける必要がある、右手には大変な力仕事であり、トレイをテーブルに置く際は多少の音が出ることはままある。しかしそれは患者さんを馬鹿にしたということではない、などと纏々彼女なりの弁明をした。そしてそれくらいのは師長として当然理解してしかるべきだと反論した。「分かったわ。でも今後はなるべく両手を使うように、いいわね」

瞬時、微妙な空気が部屋に流れた、が一呼吸おいて

「はい」

と言つて看護助手は部屋を出た。

「冗談じゃないわ、音がしたくらいでクレームか、やってられないよ」

と心の中で声を出した。沼崎公子にたいする漠とした異和感が嫌悪感に変化してゆくのを感じた。

公子はゆつくりではあるがまだ歩くことができた。入浴は介助を必要としない限り毎日でも利用することが出来た。まして最近病気の性質上、帯下も多くなり毎日の入浴は欠かせないものになっていた。ところが先日おぼつかない足取りで浴室内を一人で歩行中、タイルの床に残っていたボディソープの上に足をのせ、恐れていた転倒を初めて経験した。幸い骨折は無かったが臀部を嫌という程強打し歩行不能に陥つ

た。ストレッチャーでの居室を余儀なくされた。以後入浴は介助下のみになり、回数自由度ともに大きく制限を受けることとなった。時には、痛みあまり車いすでの移動もままならず、心ならずも床上で全裸となり、いわゆる清拭を受けることもあった。

「まあ沼崎さんって思ってたより色白ね」

と岡崎看護師。

「ほんと、ほんと。それにシワも少ないのね。じゃ横になるわよ。背中吹きますから。よいしょっと。あれこんなところに黒子がある。沼崎さん知らないでしょう。背中だから見えないもんね」と石井助手が笑う。

初めはお愛想に相槌を打っていた公子も、次第に何で裸にされた上隅から隅までじろじろと観察されなければならないのか、看護師は何で黙って清め拭うことができないのか、思うだに怒りがこみ上げてくるのを覚えた。

「沼崎さん、足を開いてください。清拭します。はい、そうです、それでいいです」

そして

「ねえ智子、あのテレビ見た？ けっこう面白かったのよ……」  
と続けた。

看護師は他動的に公子の両足を広げながら補助の看護助手

と雑談を始めた。公子の苛立ちが鎌首を持ち上げた。

私の両下肢の動きが悪い、排泄が思っに任せられず、入浴もままならない、これは承知している。しかし全身丸裸でまるで見世物の品物であるかのごとく、ベッドの上に置かれることには大きな抵抗があった。

一人ならいい。数人であしらわれるときは如何にも道路に置かれた夜店の品物あるいは特売品のように、一目も二目も下に見下されている感じが何とも許しがたい感じがした。できれば家族がそつするよつに、一対一で対応してほしい、と思った。二人いても世間話が多くなるだけで、利用者に対する言葉もいや増しに子供扱いの体を強めるだけなのだ。

「ねえ、あんたたち、雑談止めて集中したら、これじゃまるでビルの窓拭きじゃない、私は品物じゃないのよ、しっかり仕事に集中して頂戴。」

「どうかしましたか、痛かったですか？」

「どうかしましたかじゃないでしょう。あんたたちね、今後は一人でやって下さい。そのほうが無駄話も無くて仕事に心がこもります」

次第に激昂してくる公子の声に、收拾がつかなくなると察して看護師達は凡その所で退室を急いだ。

公子の強い希望もあり、現場判断で翌日から清拭を一人で行うこととなった。ところが案の定患者の体位交換には多

大な体力が求められ、腰痛を訴えるものが続出した。自ずと公子の部屋から看護師の足音が遠のいた。この事は現場からの発議でウイークリカンファレンスにかけられ、問題点解決法が討議された。こちらの方針を貫くべきだ、いや転院が筋だ、患者さまの希望を徹底的に実践してみては……等々あったが

「じゃ、それなら介助シャワー浴なんかも止めてサー、機械浴を試してみたらいいじゃないの」

愛嬌のある令子の提案が通った。

機械浴とは、利用者を機械台に乗せ自力他力を必要とせず寝たままで静かに入浴させることのできる装置、またはその入浴法である。慣れて恐怖感がなくなれば高い満足度が得られるものである。公子も痛みが強いときにはこの利用者となった。定夫も暇を見つけては来院し、爪切り食事介助など小まめにその勤めを果たした。

保潔行為は順調であったが定夫には気になる点が一つあった。食事の際によくむせ込むのである。とくに味噌汁、食後のお茶をする時に目立つようであった。看護師を介して医師にもそのことを訊ねたが、ゆっくり食べなさい、様子を見ましよう、といま一つ煮え切らない返事であった。公子は両手は使えるのであるが、腰痛のため臥床していることが多く箸が使いにくいのである。従って定夫がスプーンを使ってこ

飯を口元まで補助することが多くなっていた。

そんな或る日、いつものように介助したところ、突然激しい咳き込みに襲われた。咳は止まるどころか顔色が土色に変化してしまった。大声で呼ばれた看護師岡崎由利子が駆け付けるとチアノーゼであった。急いで吸引を全開にして太いネラトンチューブを口腔内に挿入した。米飯塊が混じた多量の分泌液が吸引され公子の顔にわずか赤みが戻った。定夫は由利子に感謝した。

夕刻、医師から呼び出しがあつて定夫が面談した。そこで今、公子の頭の中では小脳に転移した腫瘍が大きくなり、喉の動きを支配する頭蓋咽頭神経の機能が障害されつつある、従って今後は口からの摂取は極力制限せざるを得ない

「結論的には経管栄養を薦めます」

とのことであった。

「お腹を切るんですか？」

「いえ注射の要領で胃に細い管を通すだけです。麻酔をするので痛くありません」

痛い痛くないの問題ではなかった。二人で囲んだ夕餉の席で毎日のように、食べられなくなったらおしまいよね、と笑った公子の声が、顔が、走馬灯のように定夫の脳裏を駆け巡ったのである。答えは留保した。後日公子が喉の渇きと空腹感を初めて吐露した。この機会だと思いこの前の医師との面

談内容を要約して話してみたが、食器があまりにも軽々しい音を立てる、いかにも自分を馬鹿にしているように響く、だから

「プラスチックの器ではなく、ちゃんとした陶器の器を使えばうまく食べられる気がするわ」

そして、ほかの人にはきつと陶器を使っているのに違いはない、とも付け加えた。定夫は初めて公子の言う事に疑念を感じた。

公子の足の動きは更に悪化の一途を辿り、移動はその殆どが車いす生活となった。腰部脊椎への転移巢の突出部が脊髄と末梢神経を圧迫しているためであった。傍目にはそつではあったが、公子自身では何より焼けるような口渴と火のような体のほてりが苦しく、ああ水が飲みたい、こくりと音をさせて飲みたいと思うのであった。諦めてはいけなないと自らに言い聞かせるのであるが、体力が消耗しきって頭の中が混乱し、ものの筋道が立たない。

塚本君江が休憩室に戻るやいなや崩れるように畳の上へ入ったり込み大粒の涙を流しながら由利子に訴えた。

「だって今までやってじゃない。突然なによ、あんたは若いって、冗談じゃない。年の違いで仕事してるんじゃないってんだよ。何よ、突然訳わかんない事言い出してさ」

「どつしたのよ、あんたこそ訳わかんないよ。話してこらん何があったのよ?」

「あのね、さつき例の部屋に行つたね……」

「沼崎さん、おはよつございませす。シーツ交換です。」と言いながら若い看護師が入ってきた。

「新しいタオルケットありますか? 体の下に敷きますか」

「無いよ。そんなものあるわけが無いじゃないか。何のためにするのよ。大体あんたたち何で個人の所有物を利用しようとするの? それつてずるくない?」

「……? でも今まで使つてましたよ。いけないんですか?」  
「いいか悪いか、じゃないのよ。本来は病院のシーツを使うべきでしょ。変なもの挟まないで、しっかりベッドメイクしなさいよ」

「は・い・ じゃ使わないでおきます。なるべくベッドを汚さないでくださいね。」

「なにをゆつてんのよ。汚れたベッドを掃除すんのはあなたの仕事でしょ、私の責任じゃないのよ。お分かりになる! まだお若いからね、とにかくシワを作らないようにしつかりやつてよ」

誰かがわざとやつたのに違いない。昨日の朝の看護師と補

助は誰だったか、よくは思い出せないがこの娘だったかも知れない。いやきつとそつである公子の想念は理由もなく確信へと高まっていった。

昨日、ベッドの上に仰臥していて背中に異和感を感じた。我慢しているうちにそれが次第に痛みを転じ、時間の経過に伴い塗炭の苦しみに燃え上がった。

「痛い！ 誰か来て」

と叫んだ刹那、ドアを開けて定夫が入ってきた。

「どうしたんだ？ 一体、そんな大きな声を出して」

「背中が痛いよ」

と言つて、誰か私に恨みを持つている人がガラスのようなものをシーツの下に入れた、それが刺さっている、だからちよつと見てくれ、と嘆願するのである。

「馬鹿な事を言つんじゃない」

と軽くたしなめてから、背中と腰の下に手を差し込み右側臥位に起こして見ると、厚手の上等なタオルケットが折れ重なっているだけであつた。定夫は

「何も無いよ」

と言つて、タオルを直し公子の体を元に戻した。

「ああ！ 楽になつたわ、あなた、ありがとつ。」

「いや何もしてないよ。ただタオルケットのシワを直したただだよ。」

公子は眼を細めて彼女の主人を見上げた。夫は既に目線はずして別の動作に移つていた。まあいい、いつものことだ。とりあえず全身から湧き上がるような眠気が脳髓を包んだ。しかし激しい脱水から夢はいつも決まつて水と食料を求めて彷徨い咆哮する自身であつた。

事の重大さを認識した病棟師長の発議により月一度のプロブレムカンファレンスが開かれた。勤務にある病棟のほぼ全スタッフが参加した。師長がまず口火を切つた。

「皆さん分かっていることとは思いますが、今私たちは一つ問題を抱えています。」

そこで是非忌憚のない意見を聞かせて欲しい、と言つものであつた。

「一体誰のこと？」

「馬鹿ねエ、沼崎さんのことよ」

ああそつが、あれ全くおかしな人よね、いやまつとつな部分もある、ダンナが全く言いなりよ、食事どつすんのかしら、とにかく頑固、言葉使いがどこか丁寧でユーモワもあるわ、冗談じゃない、等々それぞれが個人の感情を吐露した。それを束ね括るように師長が言つた。

「分かつたわ、我々の理解に不一致が在るようね。これじゃまるで「コチャコチャ」になつたちえのわね。私若い頃、方向性

を見失つたら必ずもう一度患者の立場に返つて考え直しなさい、きつと何かが見えて来るつて、先輩から教わつたわ。今でもそう信じてるの。皆の知恵を出し合つて“知恵の輪”を作つて下さい、そして更に本人家族も巻き込んで大きな“知恵の和”に広げて欲しいの……”

賛成、ここはホスピスだよ、立場の弱い患者さまと張り合うことは許されないわ、沼さんのいい点を探そうよ、じゃ原点に戻つてもう一度カルテをさらつてみよう、など話し合つた中で

「アツ、沼さん料理学校の先生してたんだア」

若いと罵られた君江がカルテの記載から目ざとく見つけて叫んだ。

「よし、それで行こう」

リーダー格の由利子が続いた。

次第に、るい瘦を強めていく公子の傍らに座り、定夫は必死に食事を介助した。水もスターチで固め、とろみ水として与えた。しかし公子はその努力に報いることができず、数回に一度嘔吐を繰り返す、その都度激しい咳嗽からせつかく摂取した食物を嘔吐することもしばしばであった。公子はすでに衰弱から自分の意見を口にすることはできなかった。ただ、ただ水がほしいと眼で訴えた。医師からは早い決断をと迫ら

れていた。公子の命を救つのか、以前からの口瘡“食べられなくなつたら終わりよ、生きてたつて意味がないわ”を順守すべきか定夫は苦悩した。しかし公子の訴えかける視線と出会つた刹那、心は決つた。定夫は結婚してから初めて公子の意に逆らつた決断をした。

「先生、お願いします」

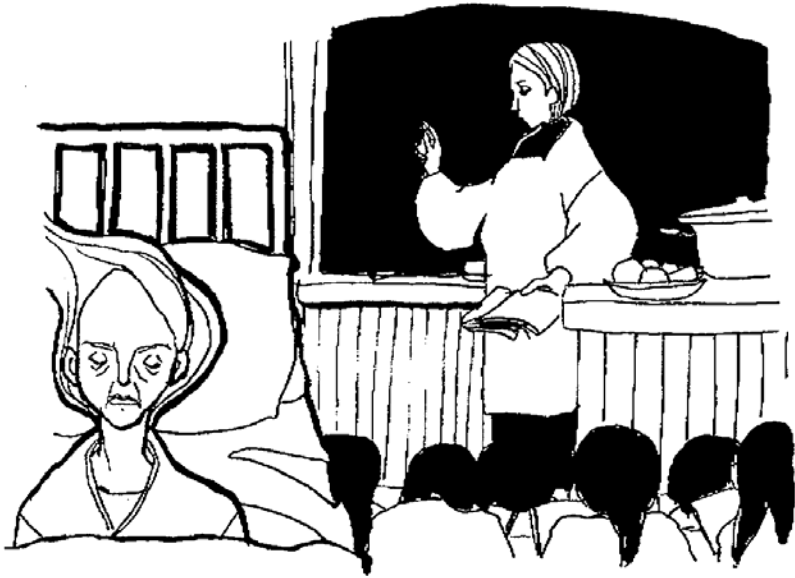
「分かりました。」

事は数日も経ず実行された。点滴が繋がり静脈麻酔で眠らされた後、局所麻酔が併用され約20分程で胃ろう造設が終了した。

すでに朦朧状態もうろうであつた公子は少量の静脈麻酔で眠りにおちた。見える景色はどこであろうか、生まれ故郷の茨城の原であるうか、好きだつた漢詩の世界であろうか、近くにはピンクの桃の花が咲き乱れ、足元はタンポポの絨毯である。遠くに目を凝らすと、杏子が梨の花が真白に丘を染め空に続

いている。見上げると、薄いコバルトブルーの穹窿から霧のように細かく真珠のように白く輝く驟雨が、音もなく幾重にも幾重にも降り注ぎ無数の小鳥たちが謳歌した。どこかで主人が、おーいと呼ぶ声がした。その方に向い、私はここよーつと手を振つた。

処置が終わわり内視鏡室から帰宅した公子は、衰弱しきつてはいたが、点滴による水分補給のためか多少肌に湿り気が感



じられた。しかしいかにも憔悴しきつた妻を見ると何か胸を突き上げてくるのを感じた。定夫も戦中派の男である。あからさまに口に出して言えない言葉、できない事があった。しかし今言わなければ機を失するかも知れない。

「おーい公子、おーい分かるか？」

と大声で呼びかけたが、あとは声が小さくなり心の中で、愛してるよ、愛してるよ、と繰り返す、そっと布団の下に手を差し延べ妻の手を握った。何度も握った。こころなしか偶然か握り返されたような気がした。

高品質水溶性経管栄養剤と十分な水分の補給により公子の体力の回復は順調であり、下肢麻痺は残しつつも意識レベルは正常化した。栄養のバランスが是正されるに従い、公子の精神も安住の方向に向かった。毎日の清拭の際には

「まあ、こんなに若い人たちが赤の他人の年寄りの体を拭いてくれるなんて、うちの娘では到底できません。ほんとにありがとう」

お礼の言葉も自然に口にするようになった。畢竟スタッフの足の運びも繁くなり、ある時機を見て幸江が

「沼崎さん昔先生してたんですか」

「そうよ、専門学校で調理を担当したわ」

「ワッ、私も習いたい」



「いいわよ。もつとも私動けないから、やっぱり無理だわ」  
「大丈夫。先生は頭がクリアーだから、ラウンジまで私が車  
いす押しまーす」

「そーお、じゃちよつとね」と事は計画通りとんとん拍子で  
進んだ。

「では皆さん、今日から沼崎先生の料理の勉強会を始めます。  
では先生よろしくお願ひします」

と愛層のいい飯塚が司会役となつた。パチパチと、3人の  
生徒役のスタツフが手を叩いた。

「皆さん料理とはなんですか？ もてなしですよ、その心で  
す。それとも一つ大事なことは？」

「はい、ええと、食べることかなア」

「面白い答えね、だけど正解は天の恵みに感謝し、自然から  
の贈り物に大切にする行為です」

「オー」

「普通右手で包丁持つわよね、その時足の位置は？」

「はい、床の上」

「あなたつて面白いわね。でも正解は右足を後ろに引いて半  
身になるのよ。そお、よいドン、あの姿勢ね。爆発的に切  
れ味が向上するのよ」

週一回の公子の話は評判となり聴衆も次第に増した。

「じゃ今日はデザートね。熟れておいしいメロンを見分ける

コツは？ 振つてみるのよ、耳元で種が動く音を聴くのよ。  
感觸といつてもいいかな。むいた皮はどうするの？ 捨てる  
の？ だめでしょ、皮はぬが漬けに最高よ」

好評のまま講義は5、6回続いたが、病勢の進行に伴いそ  
れも叶わぬものとなつた。毎日の検温の際

「先生のお話ためになりました。早く元気になって、また楽  
しいお話、待つてます。」

と皆が異口同音に声を掛けたが、あれが初めは“サクラ”で  
あつたこと、でも最後には皆本気であつたこと、生徒の目を  
見れば公子にはすぐ感得された。その上でただ

「ありがとつ、ありがとつ」と繰り返すばかりであつた。  
定夫が医師に呼ばれた。師長からはその時の装束を用意し

てほしいと告げられた。定夫の心は抵抗なくこれらの言葉を  
受け止めた。すでに皆で十分悲しみを分かち合つた。妻は彼  
女らしさを貫き、完全に人生を全うせんとしてゐる。なんで  
悲しいことがあるうか、定夫の心の中にむしる穏やかな安堵  
感に似た感情が流れた。

某年5月10日、薫風に乗り公子は逝つた。主を失つた病室  
に残された花瓶、誰が投げ入れたか一枝の夕チアオイ、その  
花言葉は“気高く威厳に満ちた美しさ”と聞く。

(完)

# 赤い光芒 (その二)

重症くも膜下出血の「オペ」

で信頼は得られたか

浜名 新

A 病院の事例回想

「Ｉ・Ｃ（説明と同意）」

「ひどい再出血だな、脳ヘルニアから救命するには、手術しかないね」

「これから、オペになるんですよ」

「兄夫妻に救命手術に対する『説明と同意、ＩＣ』してからさ。家族が納得しなければ、手術承諾は、すんなりいかないときもあるからね」

「家族は、急なことで、心配で、決断がなかなか出来ないとか……」

「これから正念場になるね。それをクリアしないと先に進められないわけです。外科医の宿命でしょうかね」

西沢と山岸は、勇のベッドを押し、うす暗い廊下をＩＣ

Ｕへ急いだ。

深夜に近い時間帯で、病院の薄暗い廊下は、なんとなく不気味な雰囲気か漂っていた。ベッドの後ろを押ししていた西沢は、勇の様子を観察しながら、エムシーイー（MCA、中大脳動脈の瘤）の再破裂を誘発させた因子は何かを考えていた。

苦労して出血発作六時間以内に脳血管撮影したことか？ 兄夫妻と対面した勇の精神的動揺か？ 生体防衛的に血小板の止血作用でできた「かさぶた」が、「くも膜下出血」による脳圧と血圧が急に上がり、再度はがされて、瘤の孔から血流に乗った血液が一気に流れ出したためである。

通常、破裂脳動脈瘤の臨床では、再破裂（出血）のたびごとく、くも膜下出血並びに脳内出血の量が増えて、症状は重篤となり、致死率は増大する。

当直医の西沢は、脳外科医としての使命感から、自分の経験と知識から、患者を救命するには何をすべきかを考えていた。

端的にいえば、頭を開き、脳内の血の塊と液状の血腫を取り除き、頭蓋骨をはずして、脳圧を減じさせる「減圧開頭血腫除去術」と、瘤の再破裂を根本的に防ぐ「破裂脳動脈瘤根治術」しかありえない。

兄夫妻と西沢は、ＩＣＵに隣接した面談室で、再び対面していた。

「I・C(説明と同意)」、あるいは、患者の「病状説明」などの場合、担当看護師が立ち会う。山岸は、ICUの担当患者が思わしくなく、深夜夜勤者への交代時刻を迎え、ICUの業務から離れるわけにはいかないようだ。やむを得ない。点灯されたシャーカステンに、急変したときのCTフィルムと入院時のものが写し出されていた。

西沢は最初の面談で実兄夫妻とのやり取りを思いだした。

原則的には、くも膜下出血を起こした破裂脳動脈瘤に対して、再破裂を防ぐ処置が必要です。瘤の首根っこにクリップをかける『クリッピング術』です。あるいは血管内の『コイル挿入術』です。

急なことですぐに答えられません。頭を開くことは、すごく怖いですから。脳の中をいじられるのは嫌だなあ。そうじゃありませんか……。

実兄である実の率直な気持ちであった。

救命治療に対する「インフォームド・コンセント、IC(説明と同意)」が始まった。午後十一時を過ぎ、蛍光灯で照らし出された面談室は静かで、三者三様の息遣いと、思惑がみられた。

義姉の美子は、緊張に耐えかねて口を切った。

「勇さんのために、夜分、ご迷惑をおかけします」

「いえ、当直医の仕事です。皆さん、突然のことで混乱して

おられると思います。勇さんは、破裂脳動脈瘤が再破裂(再出血)して急変し、脳ヘルニア状態に陥ってしまった。

急性脳ヘルニア状態が長時間続きますと、脳幹は機能障害に陥り、回復不可能となり、早晩『脳死状態』へ移行してしまいます。ですから、脳ヘルニア状態を開放させるため、今から、『減圧開頭血腫除去術』が必要になります。頭を開き、脳の内部に拡がった血の塊や液状の血腫を取り除き、脳圧を下げてから、今回再破裂した脳動脈瘤に対する根本的な根治術、つまり、瘤の首根っこにチタンのクリップをかける『クリッピング』の処置が必要です。今夜しなければ、到底救(たす)けられません」

「勇が急変したのはわかります。医学用語は分かりにくいので、分かりやすく説明願います」と、実が言った。

「承知しました。再破裂して急変したときのCT画像を、入院時の画像と比べてみましょう。白いものは、血管からもれ出した血液を示しています。脳内の白い塊は、三倍くらいに増え、前頭葉、側頭葉、基底核部、放線冠へと波及しています。髄液を満たした黒っぽい側脳室の形状は、右から左へ極度に

圧迫・変位しております。脳底部の脳槽の形も変形しています。脳の構造はモザイク状で分かりにくいですが……」

「確かに、入院時の画像より、白い部分は、かなり増えておりますが……」

「大事な脳組織は、頭蓋骨・硬膜・くも膜・髄液で、何重にも保護されています。」

脳の内部に進展した血腫で、右脳の容積は急激に膨らみました。そのため、右脳の側頭葉の内側部分の鈎回部は、テント切痕から下方に存在する中脳（脳幹）へ向かつて、逸脱・ずれ込む現象が起きました。『テント切痕ヘルニア』が生じました。テント切痕に平行に走行する動眼神経は圧迫され、瞳孔不同（瞳が左右不同になり）、光によると瞳孔の収縮反応が鈍くなりました。

間脳（視床下部）と中脳が圧迫されて循環障害に陥り、意識障害が強くなり、昏睡状態へ悪化してしまいました。この状況が長く続きますと、中脳のみならずその下方の橋脳・延髄が傷害され、『中枢性呼吸麻痺』が生じます。

その際、気管チューブを気管内挿管し、生命維持装置の象徴である『人工呼吸器』で、肺のガス交換を人工的に維持させ回復を図ります。回復しないと、人工呼吸器の延命処置で『心臓死』を免れ、『脳死状態』に移行します。医療技術の進歩、つまり『人工呼吸器』の登場で、『脳死状態』を生み出したともいえます。」

「なるほど、脳ヘルニアですか。放置すれば呼吸麻痺になるのですか？ 脳死ですって、脅かさないで下さい。」

「そこで、脳ヘルニアを開放するにはどうするか？ 手術で、

頭蓋骨を外し、硬膜を開き、脳の占拠病変となっている脳内の血の塊と液状の血腫を取り除く『減圧開頭血腫除去術』が必要です。同時に、再破裂した右の中大脳動脈瘤の、三回目の破裂を防止させなければなりません。つまり、瘤の首根っこを閉塞させる『ネッククリッピング』の根治術をおこなうことです。点滴による保存療法では限界があり、早晚『脳死状態』へ移行します。

夜中の手術は、条件的にいいとは言えません。しかし、当院では、麻酔医、手術室の協力が得られ、最善を尽くすことができます。脳の構造は、複雑で分かりにくいですから、シームで説明しましょう。」

西沢は、白板に黒色と赤色のマジックペンによる概略図で説明した。だが、実兄夫妻は耳慣れない医学の用語に辟易したのか、あるいは、手術の決断を迫られることに対して、負担を感じたのか、押し黙ったままであった。

沈黙のときが流れた。

実兄の実は、西沢の真剣に話す迫力と目つきに圧倒された。すっかり動転したのか頓珍漢な質問をした。

「勇は疲れて眠っているようですが、違いますか？」

西沢は兄の質問にうんざりし、その気持ちを表情に表さなようにした。

実兄夫妻が、勇の病状をしつかり理解し、納得しなければ、

手術承諾は得られるはずはない。まさに正念場であった。「勇さんには脳動脈瘤が四個あり、そのうちの一個が運転中に破れ、ものすごい『頭痛と嘔吐』で緊急入院しました。集中治療室で対面した直後、大きな叫び声を聞かれたでしょう。その直後、昏睡状態に陥りました。

止血されていた。『かさぶた』がはがれ、瘤に孔があき、出



血のスピードと量が激しいので、血液は脳内へ進展し、右側の脳容積は、一気に増えました。

そして、頭蓋内の抵抗の弱い部位から、脳の一部つまり、側頭葉の内側部が、下方へはみ出され、ずれ込んで、『脳ヘルニア』が出現し、脳の幹、脳幹が圧迫され、循環障害で昏睡状態へ進行性に悪くなつてしまつたのです。点滴だけでは限界があり、早晚『脳死状態』へ移行します。

手術で頭を開き、脳内の血の塊、液状の血腫を取り除き、脳圧を減してから、同時に、再破裂した瘤の破裂防止の根治術をしなければなりません。

くも膜下出血を繰り返すことに、症状はひどくなり、亡くなる率が高くなります。点滴だけでは絶望的で、『脳死状態』へ移行し処置なしです。理屈がお分かりでしょうか。

「なるほど、そういうことです。勇は五〇歳か、このまま、死ぬのは無念でしょう。やりたいこともあるでしょう。現代医療の恩恵にあずかり、生かしてやってください。是非お救ください。」

実兄はよつやく手術の必要性を分かつたようだ。

「手術は救命目的です。脳内の血腫を取り除き、脳圧を落ち着かせ、瘤の首根つこに『ネッククリッピング』しなければなりません。瘤が破れて止血に困難になれば、親動脈（中大脳動脈）の中枢側の本幹を、一時的に止めたりします。永久

に止めれば脳梗塞が出現し亡くなることも、遷延性意識障害になることもあります。

脳内の血の塊が運動神経の通路を直撃していますので、救命された場合、左麻痺は避けられないでしょう。術後の脳浮腫、脳圧亢進に対して頭蓋骨を外します」

「頭は切り開かれ、大事な脳の中がいじられるのですか？

想像するだけで、鳥肌がたつなあ。いやだなあ。怖いなあ。大丈夫でしょうか。本人は昏睡状態で判断できず、俺が決めなければならぬのか」

夫の実は不安そうに妻の目を見つめた。

「率直に、正直に言いますよ。リスクはすごくおおきいです。これから深夜の手術でしか救命できません。お兄様が判断してくれないと先に進められません」

「あなた、どうなされますか。勇さんは昏睡状態で、判断できず、答えられないでしょう。先生はあなたの返事をお待ちですわ。責任重大よ」

「分かっておりますよ」

「了解いただけましたでしょうか」

「連絡する人がいますので、いま少しお時間を……」

兄の実はこの期に及んで逡巡し、結論を言い出せない。

「いったん席をはずさせて下さい。一五分後戻ります。そのとき結論を……」

西沢はいらいらしてきた。職員の控室でコーヒブレイクして、気分転換を図った。

それにしても、夜、西沢から突然呼び出されて、実弟の緊急手術に対して諾否を求められた実兄の逡巡する態度は、西沢のはやる気持ちを鎮める効果があった。

西沢は患者の様態が心配になり、彼を観察した。

「脳圧下降剤の効果で、意識レベルは痛み刺激で覚醒しないものの、払いのける動作は存在している？ 三桁で、いびき呼吸だが、酸素飽和度は酸素吸入で正常値を示し、瞳孔不同はあるが眼頭反射は維持されていた」

実兄夫妻へ伝えたい事柄を理解させ、結論を引き出されるように努力をしたのだから、彼らは分かってくれるに違いない。大事な弟を見殺しにはしないだろう。だが、手術を拒否した場合はやむを得ない。そのときはそのときだ。点滴による保存療法も一つの選択肢に違いないではないか。

.....

連絡を受けて西沢は面談室へ入った。退出するときとは違った雰囲気の流れていた。

「覚悟を決めました。手術よろしくお願いします」

「はい、承知しました。最善を尽くすよう努力します」

西沢は夫妻に向かって慇懃に返事した。

切羽詰まったあわただしい時に、医師と患者側との間

に一筋の灯りが灯されたことは決して偶然ではないだろう。

西沢は脳外科医の使命感から、救命手術の意義と必要性を、患者側に理解させるべき粘り強い努力をした。

その結果、患者側は手術承諾を決定された。まさに医師と患者側との間に、大切な信頼関係の糸が繋がったのである。

だが、手術の結果次第で、灯った灯りは、すぐ消えてしまふ、きわめてもろいものかもしれない。信頼の糸が切れてしまえば、たちどころに、医師への不信・憎悪が芽生え、あるいはクレームになり代わるかもしれない。

しかし、西沢としては、一旦、築かれた信頼関係を信じて、救命手術に進むしかないわけだから……。

手術実施と決まれば、術前の準備、肝心な手術と、重大な任務が西沢の肩にのしかかってくる。手術承諾書の作成、手術申込書の作成、輸血申込書の作成、患者の頭の毛を剃るところ、助手の確保などである。

まず、「手術承諾書」の作成である。

「説明」には患者側の理解度に応じた、そのときの医療水準に見合った、治療の選択肢が必要十分に、説明明示されることになっている。医師はそのときの患者の様態から、医師の経験と知識に応じて、最適な治療法を説明し、勧める。良い面、悪い面（合併症）を十分説明する。この場合、「救命手術」

が対象であった。

「同意」には患者側が説明を聞き、理解し、自己決定された事が含まれている。必要な治療内容を理解し、治療内容により負の結果が起こりうることを了解された上で自己決定していただく。治療開始までに、時間的余裕があれば、あるいは患者自身の意識が明瞭で、自身で検討し、セカンドオピニオンの受診、あるいは他の病院へ転院とか、選択肢は広がる。

だが最終的には、自己責任・自己決定で意思表示が求められる。しかし、緊急事態の場面、選択肢の中から「救命手術」しかベストの治療法が無いと宣告されれば、家族の困惑は、計り知れないのも真実であろう。

現在でも、多くの病院では、患者側と医療側とのフアジー（あいまいな）関係で診療・治療が行われているのかもしれない。目の前にいる医師を、一応、信頼するからこそ、気楽に、深く考えもしないで、口にするのかもしれない。

「素人ですからすべてお任せします」、「何も分からないのでよきに計らってください」、「良いと考えられる治療法を行ってください」などなど。

患者側は、治療を受けた自分たちには、責任を負ったという自覚は極めて乏しいように思われる。医療に対する過剰な期待から、完璧な治療結果は当然であり、医療技術が進歩してどんな病気も治るはずだ、治らないのは担当医師の治療が

不十分であるとのマスコミの論調もあり、合併症で不利な状況に陥った場合、医療側にクレームを示し、何らかの代償を求めようになるのではないかと？

最近、怪物患者、クレーマーとして医療の現場を混乱させる異常な社会現象として注目されている。

医療事故は、民事のみならず、刑事罰として告発される場合もある。

福島県立〇病院の産婦人科医師の事件の成り行きは注目された。二〇〇四年帝王切開で出産した女性（当時一九歳）が手術中に死亡した事件で、業務上過失致死などの罪に問われた産婦人科医師（四〇歳、休職中）に対し、福島地裁は二〇〇八年八月二〇日「標準的な医療措置で過失はなかった」として無罪判決（求刑禁固一年罰金十万円）を言い渡した。

患者側と医師の信頼関係が維持されていても、一旦こじれてしまつと、厄介な展開とならざるをえない。

西沢は手術承諾書に、手術名として、「減圧開頭頭腫除去術」並びに「破裂脳動脈瘤根治術（ネッククリッピング）」、麻酔は「全身麻酔」と記入した。

特記事項として、\*未破裂脳動脈瘤には手をつけない。\*左側の片麻痺は避けられないこと。\*術後、血管攣縮が出現すると予後不良（死亡）になる。\*瘤が破れて止血困難の場合、中大脳動脈本管を一時的に止め、永久に止めねばならな

くなる場合、予後は厳しくなる。\*脳ヘルニア状態が厳しいので、遷延性意識障害、脳死状態、亡くなる場合もありえる。

最後に読み上げて、兄の実際のサインと押印をいただいた。

急性頭蓋内圧亢進による脳ヘルニアをきたした患者に直面した脳外科医は緊張する。脳外科医としての使命感から、全力を尽くして救命に立ち向かう。やりがいのある場面に違いないが、真価を問われる場面でもある。

脳外科医は、破裂脳動脈瘤のクリッピングに異常な執念を燃やす。なぜか？

クリッピングというスリリングな「とき」が、医師をとりこにする「とき」かもしれない。不十分な瘤の首根つこの剥離でクリッピングする「とき」は、瘤が破れやすい「とき」で、今までこつこつと積み上げてきた努力が水泡に帰する「とき」かもしれない。穿通動脈などの微小血管一本を損傷する「とき」は、患者に後遺症などのダメージを惹起させてしまつ「とき」かもしれない。

総じて、手術中のトラブルが無ければ、おのずと結果はついてくるのは、悪性腫瘍の場合とは、きわだった違い（予後の結果）であろう。

急性の頭蓋内圧亢進をきたして脳ヘルニアをきたす疾患には、頭部外傷による急性硬膜外血腫、脳挫傷を伴つ急性硬膜下血腫、高度な高血圧性脳内血腫、脳腫瘍の増大進展例、急



性水頭症、急性期の広範な脳梗塞、重症くも膜下出血、慢性硬膜下血腫進展例、脳炎急性期などが、遭遇しやすい病態と考えられる。これらの病態では、適切な対応がなされても、「脳死状態」へ移行するかもしれない。

日本では一九九七年七月公布一〇月施行、臓器移植法が制定された。臓器移植を前提とした「法的脳死」を受けた患者の多くは、先にあげた病態であった。急性脳圧亢進を示して脳ヘルニアに陥り、治療を受けられども呼吸状態が不良なため、生命維持装置である「人工呼吸器」で肺のガス交換が人工的に行われ、「心臓死」を免れた人たちであった。

西沢は、手術室の看護師の首谷へ電話連絡した。

「緊急です。五〇歳男性の破裂脳動脈瘤のクリッピングです。至急伺います」

ミッドナイトのオペ

怒りに震えている「ブレイン」

手術承諾書を手にした西沢は、ICUの勤務室へ入った。今まで気にもとめていなかったが、入り口に一月の標語が貼られていた。

「後悔先に立たず。注意してください」

「ヒアリハット」、「アクシデント」事例を、日ごろから考えて行動し、事例に遭遇したら、書類に記載して、提出することが求められている。職員の仕事上の油断を戒め、注意を喚起する「標語」が、各部署に毎月掲示されていた。

今夜、やり慣れた手術とはいえ油断したらいけないぞ。脳ヘルニアに陥った再出血の重症くも膜下出血の救命手術だから、一筋縄ではいかないだろうに

西沢は、手術申込書、輸血申込書、助手の確保、勇の頭部の髪の毛の剃毛などを急いで行わなければならなかった。そして、手術室の看護師と麻酔科医師へ対面して申し込みをし、了解を求める必要があった。

西沢から口頭で頼まれた山岸は手際よく仕事をこなしていた。

「先ほど藤田医師に連絡しましたが、呼び出し音だけでした」「連絡つかないのか、まずいな。それじゃ、僕から小池医師へ連絡してみるから」

「ヘッド、剃毛しときました。チェックしてください。今回、例外ですよ!」

「すまん、すまん、ほんとに助かりました」

山岸看護師は、額が後退して髪の毛が少なくなっている勇の頭部を、バリカンでざっと刈り、T型のカミソリで右の前

頭・側頭・頭頂部分を中心に、てかてかのスキンヘッドにした。急いでいるので皮膚を傷つけ・出血した部位へ、消毒液であるイソジン液をたらし、ガーゼでカバーさせていた。

勇の頭部をチェックし終わった西沢は、病院の緊急連絡表を探し出し、スタッフの卒後七年目の小池医師宅にブッシュホンのボタンを押した。

「小池先生ですか。夜分、お休みのところ、突然の電話で申し訳ない。緊急オペのオタスケマンだ。十二時二〇分頃入室だ。五〇歳男性、右エムシーエー（MCA＝中大脳動脈）の破裂脳動脈瘤だ。ICUで観察中リブリーディング（再出血）して、脳ヘルニアさ。手伝いに来てくれ、君が頼りだからな、よろしく……」

「はい、了解しました。十二時頃には大丈夫と思います」

「そうか、来てくれるか、助かるね。じゃ、期待して待っているからな」

小池のあっけらかんとした爽やかな返事に、西沢の心は和み、「地獄に仏」の気持ちになっていた。勇気百倍、元気になった。

顕微鏡下の手術も含めて、西沢の施設では、原則として二人で手術をすることになっている。ただし、慢性硬膜下血腫の穿頭・血腫腔洗浄術では、単独で行うことも珍しくなくっている。

高ぶる心の西沢は、手術申込書を手に、急いで手術室の勤務室の入り口へ来た。ドアは閉まっていた。ドアをノックすると、「ハイ」と返事があつた。部屋へ入ると、パソコンと向かいあっている看護師がいた。菅谷であつた。

「やあ、今晚は、いつもお世話になります。電話連絡した緊急のオペカン（手術患者）の申込書です。今、カイザー（帝王切開術）は行われていないのでしょうか？ ついてはね、よろしくお願いします」

菅谷看護師は以前、脳外科病棟に働いていた。オペ室勤務になって一年以上になる。気が知れていたので変に気を使わなくてよい。

「今から、『キンキュウ』ですか、できますよ。どの先生が、手洗いなさいますの？」

菅谷は笑いながら聞いてきた。

「元氣印の小池先生だ！」

手術室の看護師たちは、外科系の医師の名前、技量のみならず、手袋のサイズまで大方知っている。医師に対する観察は、手術の実際を観察しているだけに的確である。

「患者さん、ひどいんですか？」

「ザー（SAH＝くも膜下出血）の患者で、ICUで、再出血してね。脳ヘルニアへ悪化して昏睡状態さ。ようやく家族を『説明と同意』して、へとへとさ。すぐオペがで

きるなんて今夜の患者と医師たちには、『運』があるな！是非救かつて欲しいですよ」

「救急外来患者のアンギオの情報で、『キンキウオペ』に備えてスタンバイしておりましたから『クリッピング』できますよ。十二時二〇分入室でどうかしら。『クリッピング』になると、なぜか、先生方、すごく元気になりますね」

菅谷は茶目つ気たっぶりに笑いながら言った。かわゆいえくぼが表れた。

「新人でなくて、君なら願ったりかなったりだ。あと三十分後か。了解」

「麻酔科の宮本先生に承諾をもらってくださいね！」

「オー」と、西沢はおどけて叫んだ。

平日の時間外、休日の緊急手術では、人手がある場合は別として、現在行われている手術が終わるまで、待たされるのが通常である。

手術室に隣接した、麻酔科の医局のドアをノックすると、内部から「どつぞ」という声が響いた。ドアを開けると、パソコンと向き合っている宮本の姿があった。学会でのスライド原稿を準備していたのかもしれない。お互い会釈した。

宮本が直に質問した。

「患者さんのレベルは？ 呼吸状態は？」

「右中大脳動脈瘤の破裂脳動脈瘤で、再出血して脳ヘルニア

状態へ陥り、レベルは三桁の一〇〇点です。脳圧下降剤の効果で自発呼吸はしっかりあります。深夜の手術になります、よろしくお願いします」

「入室は何時でしょうか？」

「十二時二〇分です」

「了解しました」

宮本からOKをもらい、西沢の表情は晴れやかとなった。勿体を付けられては、準備で高揚した気分は、一気に萎えまして。

この病院では、麻酔に関して麻酔科関与の場合、麻酔科独自の「承諾書」を作成する決まりになっていた。

西沢はICUへ戻ると、兄夫妻をベッドサイドへ呼んだ。

もう一度、おさらいをして家族に手術の内容、後遺症などについてだめを押した。

「これから手術室へ行きます。あくまでも救命手術です。良い結果が得られますようがんばります。術後の脳圧を管理するため、頭蓋骨を外したままにします。意識障害が続き、脳内に伸展した血の塊で、左側の手足の運動麻痺は避けられないでしょう。緊急登院するスタッフの小池医師と、二人で精一杯がんばります」

西沢は、救命されても、意識障害、左側の手足の運動麻痺などが残る可能性を強調した。たとえ、手術しても改善され

ない不利な結果を、家族に再度伝え、念を押して、手術医の心の負担を少しでも減らそうとした。

一方、家族にとつて、医師が強調する説明内容は、「馬の耳に念仏」かもしれない。切羽詰った状況下では、家族の気持ちには動転し、後遺症の内容を吟味する心の余裕は無いからである。

「今は、先生にすぎるしか方法がありません。よろしくお願ひします」

「承知しました。全力を尽くします。救かつて欲しいです。それではこれから、ここへ戻れるのは朝の七時頃になるでしょう」

「それでは、よろしくお願ひします」

兄夫妻は、西沢と山岸たちが勇のベッドを押し、手術室へ入っていくのを見送った。夫妻は思い足取りで待合室へ戻った。

すべて先生に任せただけだから、今夜、ここに仮眠して、勇と同じようにがんばってみるか。夫の呟きは、妻の美子に、あたかも命令のようにズシンと響いた。

忙しいさなか、勇さんたら、大変な脳卒中になつてしまつて、しょうがないわね。頑張ってください。私も夫と一緒にここで見守っておりますから。

西沢は患者を手術台へ移した後、手術衣に着替えるために

更衣室へ入った。

ロッカーを開け、淡いブルーの綿製の半そでのシャツとズボンに着替えソックスをはいた。

ようやく、ここまで来たか。やれやれだ。これからは肝心の勝負じゃないか。しかし、いささか疲れたな。西沢は、いつしかクッションの長椅子へ身を横たえていた。これから始まる手術の手順を、あれこれ考えるうちに睡魔に襲われ、うつうつとしてしまった。

突然、ドアが荒々しく開けられた音に、眠りを醒まされた西沢は、「ここは手術室の更衣室であることに、びつくりした。

ドアのほつを見ると小池医師の姿があった。

「やあ、来てくれましたね。ありがとつ。お休みのところにくろつさま。緊急オペは、始まるまでに準備でへとへとさ。でもやらなければ救命できないし……」

『クリッピング』久しぶりじゃないですか。右のエムシーエー(MCA)ですか?」

小池は、深夜のオペに興味津々、はりのある声で言った。

「先生は確か卒後七年目で、夏の専門医の試験を受けるのでしよう。口頭試問では実際のオペのことを聞かれます。

エーコムエー(ACOMA=前交通脈)とか何例か、エーエヌ(AN 脳動脈瘤)の『クリッピング』のオペをされたでしょう。毎夜間当直体制ですから、ザー(SAH)くも

膜下出血)の患者を受け持つでしょう。

夜中に呼び出され、助手では張り合いが無いでしょう、やってみますか?」

「難しい症例ですが、先生のご指導の下によりしくお願ひします。」

小池の目は生き生きしていた。頼もしい後輩であった。

西沢は少し間をおくと、

「少し質問するけど悪く思わないでくれ。ずばり、開頭とエーエヌ(AN)へのアプローチ(接近法)、どうします。」

このケースは、脳ヘルニアに陥った、脳内血腫を伴った破裂脳動脈瘤の『クリッピング』だ。脳に優しい手技の工夫とどうか、考えがありますか?」

「身近な先生に改まって質問されるとすごく緊張します。」

『減圧開頭血腫除去術』になりますので、前頭・側頭開頭の頭皮切開線を多少膨らませます。気休めですが、術後、脳圧を管理しやすいように、やや広範囲に頭蓋骨をはずします。頭蓋骨は冷凍保存して、後日、患者の様態が安定して骨を植えるとき、使用します。

脳内血腫に対してもつばら『吸引術』で対処します。硬膜切開に先立って吸引するか、硬膜を大きく開き脳圧を逃がしてから行つか、迷いますね。脳内血腫は再出血して間もないので、『液状の血腫』が大部分だと思います。前頭部から脳皮質

表面の『コルチコトミ(脳皮質切開)』の部位から、針付きシリンジ(注射器)で吸引します。

脳圧を減圧させてから、エーエヌ(AN)脳動脈瘤)の処理にうつります。脳の圧迫でエーエヌが破裂することもあり、瘤の発育方向に注意します。

蝶形骨に沿って脳ヘラを挿入、視神経・内頸動脈(ICA)アイシーエー)を確認します。周辺のくも膜、やや下方のリクエストのくも膜を剥離・切開し、脳底部からの血液と髄液と混ざり合った赤い液体を、丹念に吸いながら、少しずつ内頸動脈から前大脳動脈(ACA)エーシーエー)と中大脳動脈(CA)エムシーエー)との分岐部から中大脳動脈の三叉部の動脈瘤へ順行性に接近します。

途中、『シルビウス裂(側大脳裂)』の底面の入口部の硬いくも膜を剥離・切開し、脳の可動性を得て、エーシーエー(CA、前大脳動脈)とエムシーエー(MCA、中大脳動脈)分岐部から、中大脳動脈の外側を剥離して三叉部の瘤へ接近します。エムシーエー(MCA)の水平部にある線条体動脈、前側頭動脈を注意します。距離が長く、時間がかかりますがやむをえません」

「異論は無い。ある程度、脳底部のエムシーエー(MCA)が剥離されたら、脳表面の『シルビウス裂』からも分け入りませんか?『シルビウス裂』に溜まった血液を排除して血

管攀縮の予防です。気休めかもしれませんがね。確か、瘤の方向は内上向きだったな……」

「まだ、アングオ（脳血管撮影）の写真を見ておりません」「そっだったな。うっかりしていた。接近方法を聞いて安心した。」

だが、口と手の動きは別人ですからね、見慣れた動脈瘤といえども、人それぞれに微妙に違い、やさしいものはありません。俺も大きな口をたたけないが……。急性期だけに瘤の剥離中に破れる可能性があるわけで、まあ、落とし穴があると思っ注意していきましよう。

内頸動脈・中大脳動脈の血管の走行に従って、くも膜をはがし、切離して、真っ赤な液体（血液と髄液が混ざり合ったもの）を丹念に吸引して、気長に行きましょう。朝までにはたっぷり時間がありますから……」

二人の意思が合体すれば、これから遭遇するかもしれない手術操作上のバリアを突破できるはずだと西沢は信じた。

二人は五号室へ入った。

杉原勇は、既に気管内挿管され、自動麻酔に切り替えられていた。

医師たちは看護師たちと麻酔医に辞儀をした。そして、手術の始まる挨拶をした。

「よろしくお願ひします」「よろしくお願ひします」「よろしく

くお願ひします」

五人の意思が確認された瞬間でもあった。手術は共同作業である。

手術の機械だしを担当するのは菅谷で、外回りの役目を担当する看護師は箱田であった。看護師は手術では原則として、二人で分担、対応する。

小池は頭部固定器具を手術台にセットし、ピンを患者の頭皮から頭蓋骨にねじりこませ、頭が動かないように固定し、頭を左三〇度くらいに傾け、右の眉毛外側が一番上になるように固定した。そして、皮膚消毒薬であるポピヨドンヨウン製剤である「イソジン液」で手術部位をブラッシング、頭皮の感染予防の処置を行った。

手洗い場では菅谷が先行して、やや遅れて小池、西沢たちが、手指と前腕を消毒していた。箱田に手伝ってもらい、滅菌された使い捨ての術衣を羽織ると、表情は凜とした厳しいものになった。

滅菌手袋をはめた医師たちは、長い鉗子にイソジン液をたっぷり浸した大ぶりの綿球をつまみ、勇の頭皮を繰り返してすすって消毒を完了させた。

間をおき、ガーゼでふき取り、細い棒に紫色のピオクタニン溶液をつけ皮膚切開線をえがいていった。サージカルドレイプ（滅菌された透明な薄い膜）を貼付し、使い捨ての掛布

で手術を行う場所を除いてカバーしていった。

一枚皿に吸引管（二本）、電気メス、バイポーラー電気メスなどがセットされた。

菅谷から手渡されたキシロカインの皮膚浸潤麻酔薬のシリンジ（注射器）を手にした小池は、皮膚切開線に沿った皮下に針を刺し溶液を注入していった。

小池はメスを右手に持つと手術開始を告げた。

「それでは始めます。お願いします」

皮膚は少しずつ切り裂かれ、左右に分かれた皮膚の断端に頭皮クリップが装着された。

箱田は、「加刀時間午前一時一〇分です」と告げた。

無影灯に照らし出された手術台で、ドラマが静かに始まった。静寂の中に、自動麻酔器の無機質な音がりズミカルに響いていた。

小池は医学部卒後七年目で、手先が器用で、どちらかといえば手術が好きなのほうの部類に入るのかしれなかった。ようやく手術が面白くなり、毎日でもやりたい時期の入り口にいるのかもしれない。外科医に聞くと、多くの人はそういう時期があるよつである。西沢にもそついう時期があった。しかし、西沢の性格なのか手術患者を受け持つと、手術したい意欲と不安が交錯し、予定手術日の相当前から、精神的圧迫を

感じるのが常であった。

西沢は手術に伴つ負の遺産を体験した後、つまり歳と経験を重ね、技量が多少進歩しても、負の遺産に伴つ苦痛と精神的圧迫は無くなることは無く、かえつて増大した。普通の脳外科医にとつて、手術は、目に見えないおおきなストレスに違いないと、西沢は考えている。

「手術では合併症を生じさせないことは当たり前ですよ」と言われれば、「確かにそつです」と答えるしかない。

やりなれた手術でも、患者ごとに様態が違い、その日の医師の体調の具合で、ミスを誘発させる魔物が、悪さをしやすかもしれないからである。

マスコミで喧伝されている「神の手」を有した外科医、あるいは練達の外科医といえども、第三者に知られたくない負の遺産があるのかもしれない。その負の遺産の内容は、第三者に露出されないで外科医の心にそつとしまわれておくべき事柄であるつ。

まず、切開された頭皮を顔の前面に翻転させると、筋膜に覆われた側頭筋の筋層が現れた。頭皮の切開端に沿い、それを切開・止血・凝固し、もみ上げの近辺まで骨膜を含めて全層を頭蓋骨から外す。もみ上げの近辺には顔面神経の前頭枝が走行し、運が悪いと傷つけて、「医原性顔面神経麻痺」を

生じさせてしまふこともある。

サージアトームで頭蓋骨を掘削し、掘削した孔から硬膜剥離子で頭蓋骨と硬膜との癒着をはがしていく。サージアトームの刃先を取り替え、孔から孔へ向かって骨切りをしていく。熱を持ち、骨きりを助けるため、水を掛けたりする。切離された頭蓋骨を外すと、張り切ったグレイの硬膜が現れた。硬膜表面の血管からの出血する部位を丹念に止血した。

手術の邪魔にならぬように蝶形骨を、リュエル骨鉗子で頭蓋低に向かつて少しずつ削っていった。底のほうから血液がわいてきて、止血に難渋した。そこで、ゼルフォームを挿入して止血を図った。

外用止血剤として、「アルギン酸ナトリウム」(ゼラチンとしてスポンゼル、ゼルフォーム)、「ゼラチンは創傷表面に付着しフィブリンと同等の止血効果を示す。一方「酸化セルロース製剤(サージセル)は、ヘモグロビンに著しい親和力を有し、塩を作つて凝固塊となり止血効果を現す。両者は脳外科の手術に必須の止血剤である。

過去に「フィブリン糊」が使用されたときもあつた。灰色の硬膜は緊張し、硬膜を開くと脳組織が勢いよく飛び出しそうであつた。

「液状の血腫の吸引操作は、硬膜の小切開のみで、それとも硬膜を大きく開けてからにしますか?」

小池は一瞬躊躇して、西沢に意見を求めた。

「早く硬膜を開け、脳圧を外に逃がしてから、液状の血腫を吸引しよう!」

「承知しました」

小池は硬膜を半月状に切り出し、まえ側の硬膜を翻転させ顔面側の組織に縫い付けると、うしろ側の硬膜に切り込みを入れ硬膜の減張をして脳の損傷を防いだ。

初めて外気にさらされた大脳(ブレイン)には、合計二回のくも膜下出血で脳表面のくも膜下腔に流れ込んだ血液、諸所の脳の溝に赤黒くなつた血液の凝固した沈殿物、脳圧亢進で脳表面の充血した細い血管群の集簇した情景が展開されていた。

無影灯の光を浴びて、むき出しにされたブレインから、薄い透明なくも膜を通して、赤い妖しい光芒は、幾重にも重なつて錯綜していた。

脳は緊張し膨れ上がっていた。

心臓のビートにつれ、「ドクン、ドクン」と、上下に激しく揺れ、杉原勇が救いを求めている切実な表情そのものがあつた。

「かなりの出血と脳圧ですね!」

「早く、高い脳圧を減圧し、怒りを鎮めてやらないと。脳ヘルニアが進行し不可逆性変化になつてしまえば救からないだ



2011

「はい」

「CTでは前頭、側頭、基底核、放線冠にも血腫が。前頭葉の表面の部位を、『コルチコトミー（脳皮質切開）』して注射器で吸引しよう。つかつかできないぞ」

「承知しました」

小池は右手のバイポーラー（双極）の電気メスで、脳表面を被覆しているくも膜を凝固、鋏で切離すると、脳表面の皮質を少し凝固・切開し、穿刺する部位を確保した。

しかし、このちよっとした操作にも、シワツとする出血が付きまとい、完全な止血までには時間がかかってしまつ。脳圧亢進で血管がつつ血しているからである。

脳外科の手術は「止血と吸引」の連続である。くも膜の剥離を如何に無駄なく操作し、病変への接近の巧拙、周囲の脳組織を愛護的に操作し、止血を完璧にするかで予後は決まってしまう。

「神の手」と喧伝されている達人の手術操作では無駄が無くいつの間にか肝心な操作は終了されてしまつことが、テレビ放映される時代である。

「横穴針に、シリンジをつけて用意してください」と西沢が指示する。

「これでよいですか」と菅谷はすばやく器具を整え小池へ

差し出した。

小池はCTガイドによる吸引術の要領から、四〇度くらい角度で前頭葉の内部へ五から七センチメートル進め、赤い乃至赤黒い液状の血腫を吸い出した、方向と深さを変え、なおも丹念に吸つと、合計四〇ミリリットルぐらい吸いだされてきた。

膨らんだ脳は、怒りを鎮め、柔らかい脳へ戻つた。簡便な操作による見事な減圧効果であつた。

小池は、脳表面が乾かないように生理食塩水に浸したガーゼでカバーした。

「第一関門は無事クリアした。さあ、顕微鏡をセットして、肝心のクリッピングに移ろう。勝負はこれからだ」と、西沢は次のステップを指示した。

「このくらいの脳の柔らかさなら、『クリッピング』できますよね」

小池は自分に言い聞かせるよつにつぶやいた。

箱田は天井に吊るされた顕微鏡を、医師たちが操作できる高さへ降ろした。二人は顕微鏡に滅菌された袋をかぶせ終えると、頭蓋固定器具に自在脳へラ固定器具を固定した。そして、バイポーラー凝固装置と顕微鏡の光源の強弱を決める、術者の足で操作するフットスイッチ類を念に点検した。

マイクロサージェリーの操作は、足、左右の手と、左右の

目による共同作業で、術者は孤独の作業に入る。

小池は顕微鏡の光を蝶形骨の内側の硬膜内へ入れた。脳表面へ長方形の綿を敷き、脳へらを綿の上から深部へ滑らせ、骨と脳の間へ、糸つきの綿の小片を挿入し、真つ赤な液体を吸いながら、脳へらを底面にすすめた。

西沢は、生理食塩水を注入し、吸引を助けた。

次第に、左側に黄白色の視神経が見えてきた。周囲のくも膜を切り、赤い液体を吸うと、右側に丸みを帯びた弾力あるやや赤みを帯びた縦長の索状物が見えてきた。内頸動脈で、動脈硬化を示す黄色い斑点が見られた。動脈の周囲のくも膜をはがし、突つ張るくも膜をきり、血管の走行に従い、順行性にたどっていくしかない。丹念に吸い出しながら、やや下方のリリクエスト膜を破り、脳底部の髄液槽との交通をつけた。

術者は孤独の作業に没頭しなければ、決して目的を達成することはできない。

ようやく「シルビウス裂」の底面の入口へ達した。この場所は前頭葉底面と側頭葉底面の移行部で、「シルビウス裂(側大脳裂)」の底面の入口に相当し、くも膜は厚く硬く、脳をしつかり保護している。手術ではこれを切り離し、脳の可動性を得て、内頸動脈の分支部、すなわち前大脳動脈と中大脳動脈が分かれる部位から中大脳動脈へ辿らなければならない。

くも膜を外し、つっぱるくも膜をマイクロの鉗で切り、分支部から外側へのびる中大脳動脈が垣間見えてきた。

「エムシーエー(MCA)の外側のくも膜を外して進めば、動脈瘤のある三叉部へ……」

「はい、承知しております」

小池は手を休めることなく、左手に吸引管を、右手にバイポーラー摂子を、双眼鏡をのぞき、くも膜を剥離、鉗で切り離す操作を熱心に進めていった。

「緊急時、エムシーエー(MCA)の本幹を遮断するスペースを確保したかい？」

「この位置でどうでしょうか」

剥離は確実に進行していたのか、小池が直ちに答えた。

「見せてくれないか？ 十分なスペースで、いいんじゃないか。君はすごく上手だね。センスがある。」

今度は、「シルビウス裂」の末梢から、脳表面から攻めてみませんか、本幹の血管を遮断する部位を、確保したから……」

西沢は、一時的遮断クリップを用意して、突然に出現する瘤の破裂(出血)に備えた。西沢はある症例では積極的に一時的遮断操作を実施してきた。瘤からの出血でパニックに陥るより、事前に出血防止の準備をするほうが得策であると思つている。しかし、ある症例では瘤が破裂し止血困難に陥つた事例があつた。突然、鎮魂の気持ちがあつた。

小池は注射針で、シルビウス裂のくも膜を丁寧に剥離し、前頭葉と側頭葉の脳を分け入った。二回の出血で血液が入り込み、癒着が強く、藪こぎのたとえで、遅遅としていた。ようやくエムシーエー（MCA）の枝をとらえて、下方へ丹念に辿っていった。枝の本幹らしく部位に行き着いた。

今度は、顕微鏡の光を脳底面に入れ、脳ヘラをいれ側頭葉を多少持ち上げるようにしてMCAの本幹の血管をはがし、水平部の動脈から三本の枝が分かれる分岐部に小さい瘤が垣間見えてきた。

表面のシルビウスの静脈やくも膜を剥離していくと、意外にも、浅い部位に、瘤が見えてきた。

急性期手術では瘤の剥離操作中に瘤がプツと破れて血の海に一変し、パニックに陥ってしまう。術者の心臓に極めて悪い。幸運に止血されればいいのだが、西沢に一抹の不安がよぎった。

小池は深呼吸し、気分を落ち着かせた。瘤の全貌を把握するため、前面の親血管から分岐している首根っここの周囲を剥離しているとき、瘤の先端部の癒着を引っ張ったのか？ そのとき、勢いよく血液が噴出してきた。

瞬<sup>また</sup>く間に、渦を巻いて術野のスペースが真っ赤な液体で充滿してきた。

「破れたな！ とつとつ来るものが来たぞ」と、西沢は叫ん

だ。と、同時に西沢は、太い吸引管を直ちに硬膜下腔へ挿入して、赤い液体を吸いだしていた。

「癒着が強いですから、少しひっぱったときに、プチュッと音がして……」

「血管ではないだろうな？ 急性期のオベでは、止血されていた。かさぶた」がはがれやすくて、瘤の壁が破れやすいんだ。これからが真剣勝負だ。慎重に大胆に。出血した部位に綿片をあて、吸引管で上から吸引・圧迫していけば、止まるでしょう。そうなって欲しいね。一息ついたら、トランジックトリップ（一時的遮断）を、エムシーエー（MCA）の本幹へ掛けよう。多少、心の余裕が生まれ、左右の手の動きはよくなるはずだから……」

「たぶん、あすこで……」小池の声は震えている。

「それ綿片だ。吸引して、きれいにして、バイポーラー摂子で、綿片を、出血したポイント（部位）へきちつとアプライ（当て）してくれよ。頼むから」

「がんばります」

西沢は小池をエンカレッジ（励まし）した。困難な場面でのアドバイスにより、術者はどれほど救われるか知れない。小池は助手として、何回も「火事場」に遭遇したに違いない。が、術者として予想外の「火事場」に遭遇してみると、その怖さ、心理的圧迫の程度が、助手として立ち会ったときに感

じたときは、まるで違う。金縛りに似た恐怖の連続であることを自覚させられた。

必要な操作をしていたのにこの出血はなんて不条理なことだ。がんばって凌いで、自分で止血するしかないわけだ

から。患者の今後を左右しかねないではないか――

「宮本先生、マニトールの急速注入を！ 一時的に、エムシ

―エー（MCA）の本幹を遮断しますから……」

「了解しました。ステロイドを、かぶせましよう」

「圧迫止血されている間に、エムシ―エー（MCA）を確保し、一時的遮断クリップを掛けよう。きついけれど、エムシ

エー（MCA）の本幹を視野に……」

「はい」

だが、この操作にも、脳へらを移動し、顕微鏡の光と角度を調整しなければならぬ。ようやく、一時的遮断クリップがMCAの本幹に装着された。

肝を冷やされた「火事場」は、どうやら「ボヤ」ですみそうだった。

止血操作を何回も繰り返すようだと、しだいに脳が腫れてこないと限らない。その可能性は「回目のおも膜下出血を

経ているので、大いにありえた。

瘤の先端部とシルビウス裂のくも膜を、慎重に剥離した。

最終的に、瘤は本幹と三本の主要な枝との間に鎮座し、内

側・上方へ向いているのが観察された。一本の枝（分枝）が瘤の中ほどで巻きついていた。瘤の根元でないのは幸いだつた。

裏側の剥離に移っていった。

「少し瘤を持ち上げ手前へ倒したら……、瘤の首根っこを凝固、つぶつぶっている膜を切れれば、すっきりして、クリッピングのスペースができると思うが……」

「先の丸い銀の剥離子で持ち上げながら、やってみます」

菅谷が用意した、直線型のクリップを装着したクリップ鉗子を手にした西沢は、それを使い、かけ布に試しクリッピングして、機器の調子確かめた。

小池はクリップ鉗子の把持部分を閉じかげんにし、クリップのブレードを少しひらき、ブレードを瘤の首根っこに挟み込むように挿入させ、落ち着いて装着させた。裏側を観察すると、動脈の分枝を挟み込んでいないことを確認した。

小池は、脳へらと顕微鏡の光を変えて、遮断したクリップをエムシ―エー（MCA）の本幹から外した。すると、動脈は血流が流れ、丸みを帯びて充実性を増し、しつかり拍動を始めた。

箱田は、「約三五分の遮断時間でした」と告げた。

「山場を乗り切ったね。ごくろうさん」

「やっと、『クリッピング』できて、すごく嬉しいです。あり

がとつございました」

小池の顔に、しつかりやり遂げた充実した気がみなぎっていた。

手術は終盤になっていた。まず止血を何回も確認しなければならぬ。宮本に頼んで血圧を少し上げてもらった。生理食塩水による術野の洗浄を繰り返し、止血を完璧にしなければならぬ。

小池は細い排液管を内頸動脈の隙間の奥へ、シルビウス裂の隙間、硬膜の外側のスペースに挿入・留置した。

留置された排液管は、特定の部位に留置し、溜まった液体（血液・髄液など）を体外へ排除して、合併症を未然に防ぐ処置で、「命綱」であった。

外された骨をきれいにし、滅菌済みの手袋にしまい、冷凍保存することにした。

閉頭の作業に移行した。一時間くらいはかかる。

手術に参加したクルーたちは、疲れていたが、救命手術が無事終わり、爽やかな、和らいだ気分にも包まれていた。

ベッドに気管内挿管されたままの勇がいた。

宮本は時折バックを押して酸素を勇の肺へ送り込んでいた。ベッドを押して手術室から廊下に出ると、日の出の陽光は廊下の外側の窓の下部をオレンジ色に赤々と染め出していた。

冷気が肌に心地好い。

マカロニ症候群 簞たらけの勇

ICUの待合室に隣接した仮眠室には、椅子と机、ソファと毛布が用意されていた。昼夜を問わず担架で搬送される救急患者の関係者が、仮眠できるように配慮されていた。

実兄夫妻はコノ字型のソファに横になると、弟（義弟）のことを考えているうちにいつしか眠り込んでしまった。

ドアをノックする音に目覚めた夫妻は、自宅でないことはすぐ気がついた。誰がドアを叩くのか一瞬いぶかしく思った。

「お休みのところ恐縮ですが、杉原さんでしょうか？ 西沢です」

夫妻は、西沢医師と分かると、ドアのほうへ直立して向き直った。

入り口に、淡いブルーの半そでの手術衣を羽織った西沢の姿を認めた。

「寝込んでしまい、暗くて分からなかったものですから。大変失礼しました。すると、手術は終わったんですか？ ずいぶん早いようですが」

「いいえ、もう、朝のラジオ体操の時間になります。手術は無事終了、勇さんはICUへ戻っております。取り急ぎお伝えしたいと……」

「ご心配掛けてすみません。予定時刻にICUへ戻れたことは、手術は成功したんですね。ありがとうございました」

妻の美子が礼を言つと、二人は深々と辞儀をされた。

「勇さんは長時間の麻酔と、術後の呼吸管理のために人工呼吸器で管理され、麻酔剤で眠っております。激しい脳のむくみ（脳浮腫）と脳圧亢進状態が強いので、麻酔薬で脳細胞を保護しております。手術前とは様子が違い、管だらけで、戸惑つかもしれません。ぜひ、お会いになって下さい」

「どんな様子なのか見たいですね」実兄は言った。

西沢は夫妻を連れ立って勇のベッド脇へ案内した。深夜担当のナースの土井は、椅子から立ち上がり、西沢たちに軽く辞儀をして、西沢に病状を報告した。

「お疲れのところ、ご苦勞様です。小池先生は、先ほど、髄液排除用のチューブを脳圧調整機器につなげ、排液圧を二〇センチメートルにセット、赤い髄液は体外へ流れ出ています。

患者様の酸素飽和度、排尿、バイタルサインは落ち着いております。胃からの出血はありません。自発呼吸があり、喀痰とか咳で人工呼吸器とバツテングするときもあります」

「ありがとう、よろしく観察願います」と、西沢はねぎらった。

西沢は夫妻に患者の様態を説明した。

「管だらけで奇異に思われるでしょう。口から出ている気管

内チューブは、人工呼吸器から出ている二本の蛇管とつながり、人工呼吸器による補助呼吸が行われております。勇さんは自分の呼吸があり、気道内の分泌物や強い咳きこみで呼吸器とバツテングしてアラーム（警報）が鳴りまして……。

胃に留置されたチューブが鼻の穴から、膀胱に留置されたチューブがペニスから、頭からは3本のチューブが貯留する袋につながっております。脳内に留置した一本は、脳圧調整用の機器につながり、脳圧が二〇センチメートルより上がると、赤い髄液が体外へ排液され、脳圧を調整するようにセットされております。脳内の浅い部位に留置した一本は、ゴムの袋に、脳をカバーする硬膜の外側に留置した一本は皮下に溜まった血液を体外へ排液してあります。頭蓋内の合併症を予防するチューブで極めて大切な『命綱』です。世間では、重症の手術直後とか、延命処置として、胃瘻、腸瘻、気管切開のチューブ、留置バルーンなどを挿入する言葉として、『マカロ二症候群』あるいは『スパゲッティ症候群』などと称することもあります。ご心配を掛けます。改善するよう対応していきますですからご安心ください……」

「くも膜下出血の手術後の状況を、初めて見ました。作動する人工呼吸器と管だらけの勇さんに、胸が締め付けられ、息苦しくなりました。大変なことは分かりました。本当に回復するのでしょうか？ とても心配です」

義姉の美子は、義弟がこのまま回復しないで、「植物人間」になるのではないかと、悪い予感がして胸が騒いだ。

『大丈夫回復します』と自信を持って言いたいですが、一週間ぐらい注意深く見守るしかありません。救命手術は、生きるか死ぬかの瀬戸際の手術で、医師たちは必死で、どつしても管だらけの重裝備になってしまいます」

西沢は正直に答えた。

「身内が大きな手術をしたのは、勇が初めてでして……。身内として勇の意識が速やかに回復して、普段の状態に戻って欲しいですね」

実兄の実は率直に言った。

「お身内の不安な気持ちはもつともです。脳ヘルニアに陥った重症でも膜下出血の術後管理は、呼吸・循環・脳圧・血管攣縮予防』、と多方面に気を配って診なければなりません」

今回破れた動脈瘤が存在した右側の内頸動脈、あるいは右側の中大脳動脈に、『血管攣縮』、つまり血管が細くなり血流が途絶える現象が生じますと、脳梗塞へ進展し、意識障害や麻痺が強くなり、最悪、再び脳ヘルニアへ移行し、亡くなることもあります。患者さんの意識レベルが回復すれば、目障りな管が順次外れますから、「ご安心下さい」

「難しい理屈は分かりません。先生のお言葉を信じて、何卒よろしく願います」と、美子は言った。

「今日、早いうちにCT撮影します。ICUでは、呼吸器關懷係は麻酔科の管理です。意識が戻り、自分の呼吸がしっかりし、痰を気管の外へ出せれば、気管内チューブを抜くと思います。そうすれば口元がすっきりします」

「わかりました。今日、昼間、建築現場へ行かなければなりません。夕方、詳しい説明をお聞きしたいですが……」実兄は言った。

「結構です。夕方六時以降の面会時間にご説明しましょう」  
「くどいようですが、身内の気持ちは、勇がよくなってくれることです、その一点です」

「承知しました。患者さんが早く改善するよう願っております」

西沢は勤務室に小池医師を手招きして、兄夫妻に紹介した。  
「一緒に手術した小池医師です」

「初めまして、小池です。西沢先生と一緒に手術を担当させて頂いたできました。手術は成功しましたので、是非救かつて欲しいです」

「勇のためにご協力いただきまして、ありがとございまして。失礼します」

実兄夫妻はICUから退室した。

「オベ」の「麻酔チャート」を吟味した。出血量二五〇ミリリットルで、あの時「ボヤ」で消し止められなければ血の海

へ、手の付けられない本格的な「火事場」になれば、輸血に次ぐ輸血、血圧は下がり修羅場となったに違いない。

だが、練達の士ならば、好機到来と瘤の周りの肝心な詰め剥離を行い、クリッピングしてしまおう。技術と経験が未熟な者にはとつてい無理な話で、止血に難渋すればするほど、それだけ予後は厳しく、不幸な結果にならざるを得ない。

西沢の心配事は瘤が破れて出血したとき、「ボヤ」以上に悪くならないように、中大脳動脈の本幹を敢然と意識的に、「一時的閉塞」したことに對する代償であった。

閉塞時間は二分と意外と少なく、脳梗塞予防剤として脳圧下剤のマニトールと副腎皮質ステロイドホルモンを直ちに血管内へ注入した。そして閉塞クリップを外すと、中大脳動脈の血管の太さは元に戻り血流の流れを確認した。

だから脳梗塞は出現しないだろうと西沢は樂觀した。希望的観測で、頸動脈系の灌流域に広範囲に脳梗塞が出現すれば遷延性意識障害、脳ヘルニアによる死亡もありえる。

「脳虚血防止剤のトロンボキサン合成阻害薬（キサンボン）、フマル酸ニゾフェノン（エコナール）あるいは、脳細胞保護剤であるバルビツレートを使いますよ」

小池は強い口調で西沢に言った。

「そつだな、広範囲の複数の脳葉の脳梗塞に進展すれば、俺

たちが、深夜 格闘したオペの苦勞は台無しになるからな。それ以外にも、昔から『三日療法』があるぞ。瘻塞予防剤はバルビツレート剤が注入されるから当分併用しないでおこう」

「承知しました。いいと思われる薬と方法を使い、万全を期しますから」

小池は注射箋に項目別に薬剤を書き込んでいった。

「このケース、どうですか、救かりますか？」

小池は執刀者としての配慮を口にした。

「血管攣縮させ乗り切れば、何とかいけるんじゃないか。瘤の破裂は『ボヤ』ですんだからね。トランジットクリップのおかげさ。君は、『運』があるね」

「なんとしても、救かって欲しいですよ。杉原さんに頑張ってもらわんと」

「脳内血腫を伴った、脳ヘルニアに陥つたザー（SAH）の術後は、一筋縄ではいかなさうがね……」

西沢の脳裏に、「血管攣縮」による脳梗塞と脳浮腫による「脳ヘルニア」で喪つた過去のケースが浮かんだ。

「先生、今日は、外来診察では？」

「徹夜のオペをしたからといって、休診するわけにもいかなしいし……」

「しばらくここで観察しますから」小池は先陣思ひであった。



「先に失礼するよ。夕方の説明は、俺がするから……」  
西沢はシャワーを浴び、さっぱりした。

当直室へ立ち寄り当直日誌に記入し、庶務課の日誌入れに投函した。医局談話室で、上席当直医が検食する、配膳された冷めた朝食を摂った。ライスと味噌汁、小ぶりのタラコ、納豆、おひたしであった。テレビの画像をぼんやり見ていた。

さて、今日はどんな日になるのか、吉になるか凶になるか？ 外来診察、夕方手術患者への病状説明、佐藤との食事への誘いなど、思案する西沢であった。

西沢は携帯を手にする、佐藤の携帯へメールを飛ばした。オペカンの状態からしばらく急変しないように思われた。

《今晚食事どうですか？ 池袋東口Eホテルロビー7時半》

体よく振られるかもしれない。当たって砕けるというじゃないか。俺の気持ちを伝えられたらいい。

第一診察室へ入ると、机に患者リストが置かれていた。外来主任看護師の松屋は用事を済ませて帰ってきた。朝の挨拶を交わすと、松屋は言った。

「深夜のオペでお疲れでしょうが、外来診療よろしくお願いします。私、神戸の救命センターにいましたから、『クリッピング』は大変ですよ。救かるといいですね」

『運』があるかいね

『運』とは意味深じゃないですか？

「動脈瘤から出血したけど、『ボヤ』ですんだからね。救かって欲しいですよ」

再診患者が中心で、病状を聞き、薬を処方していく。医業分業で院外処方箋を発行する機会が多くなった。

一〇時半頃、K診療所から紹介された六五歳の男性、T氏の番になった。

「本人は飲酒で転倒し頭を打撲。その後、頭痛あり。慢性硬膜下血腫疑いです。CT画像などご高診願います」

T氏はふらふらするのか、机に手を衝いて丸椅子へ腰かけ、出張で受診が遅れたことを言い訳した。

「頭が重く、右の手足がしびれ、言葉も滑らかでなくなりました。K診療所で説明を受けましたが、怖くて、つい遅くなりました」

「頭部打撲と筋力低下、頭痛、何かありそうです。脳画像検査のCT撮影！」

CT写真をシャカステンへ写し出すと、頭蓋骨の内部に沿って三日月状のグレイの幅広のゾーンが広がっている。脳室の形状は対側へ押され歪んでいる。典型的な「慢性硬膜下血腫」像である。

「やはり、血が貯まっております。外傷から一か月経っていただきますか。CT写真から手術しないといけません。頭蓋骨に一箇所穴を穿ち、血腫腔を洗浄し、同部にチューブを留置します。チューブから排液がなくなればチューブを抜きます。日

帰り手術も可能ですが、入院・手術が原則です。暴れたりして不穩になる人もいるからです。軽く考えないほうがいいですよ」「やはり手術が必要ですか。困ったな」

「できるだけ早いうちに手術を受けないといけませんね。診療所の先生へご返事を書きます。CT写真を貸し出します。ここ

でよければ入院の予約をされませんか？ それとも診療所の先生と相談されてからにしますか」

慢性硬膜下血腫は認知症や脳卒中と間違えられることがある。

治る痴呆などと言われているが、術後 高齢者ではなかなか脳が盛り上がらない。脳外科領域ではマイナーな手術になる。だが、毎ると落とし穴にはまって手ひどい目にあいかねない。



血腫腔内再出血、脳内血腫出現、血腫の再貯留とか予想外の併発症があるからである。

外来診療から開放された西沢は、小池にオベカン（手術患者）の具合を聞くと、さして変化は無いとの返事であった。

西沢は小池を誘い気分転換に院外へ出た。寒いが陽光は降り注いでいた。最近、通りに面して洒落た回転寿司がオープン、築地直送で鮮度がよく人気店らしい。

西沢は「中生」を二つ注文。店員はきびきびしている。二人はジョッキをガツンと鳴らし、くも膜下出血とのバトルの健闘と患者の無事に乾杯した。呑んで食べて、瞬間に血は積まれていった。マグロ・エビ・シャコ・タコ・イカ・アマエビ・イワシ・アジ・カツオ・アナゴ・シヤケ・マグロ・ギョク・カンピョウまき……。腹が膨らむと、眠くなり、無口になった。

午後五時から、準夜の勤務体制になる。今夜の担当は堀江看護師であった。

六時まえ西沢はICUへはいり、CT写真を検討した。脳

内の血腫は七割くらい除去され、脳の正中構造物のシフトは改善されている。骨が除かれた部位では頭蓋骨のラインから脳がはみ出している。

勇は刺激すると覚醒する状態へ改善している。意識レベルは一〇点 三〇点の間を行き来している。だが、西沢をガツカリさせたものは、患者の左側の手足が「ダラン」としていることであつた。

堀江は、西沢に、CT写真の状態を尋ねた。

「七〇%ぐらい脳内の血腫がのぞかれています。脳の腫れは相当あります。再出血はありません」

「意識レベルは改善し、三桁から二桁へ、しかし、左側の手足の動きはだらしないう状態で、麻痺があります……」

「やはり麻痺になつてきているのか！ あれだけ血腫を除いたのにがっかりだな」

「麻酔剤のイソゾールは続けるんでしょう？」

「少なくとも三日間は……」

「順調に回復されるといいですね」

午後六時すぎ、実兄夫妻が入室された。西沢は彼らを手招きして挨拶すると説明を始めた。

「顔のむくみはひどいですが、意識レベルは回復しており、右手で『グーチヨキパー』をしてくれます。だが、左手足は『ダラン』として麻痺が認められ大変残念です。救命さ

れるとは思いますが、まだまだ沢山の関所があります。話しかけていいですよ」

「いさむ、おれだ、みのるだ わかるか？」

勇は右手足を乱暴に動かした。気管内チューブのため口を使えなかつた。

「いさむさん、よしこです。がんばりましたね」

勇は左目をつつすら開けようとしてうなずいた。右の目は頭の手術で頭皮の切開をしているので、まぶたと顔面はひどく腫れあがつて、気の毒な様相になっている。

「手術後のCT写真などをご覧に入れますよう」

西沢は勤務室内のシャーカステンの場所まで案内した。

写真の説明を受け安心した夫妻は、ICUから退室した。

兄夫妻には彼らの生活があり、実弟にはかりかかわることできない。

医局へ帰る途中、佐藤のことが気になつた。

そのとき西沢の携帯が振動した。取り出して開けると、着信メッセージが浮かんできた。

「Eホテルロビー 七時半了解」

西沢の気持ちは一気に明るくなった。

(続く)